
蒼炎のプロムナード

藤宮風輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼炎のプロムナード

【Nコード】

N1497S

【作者名】

藤宮風輝

【あらすじ】

少年は、変わることのない疲れた日常を過ごしていた。森に埋もれた田舎町フォステス。そこで暮らすアレイシス・マーシアは、ある日旅人と出会う。高貴さを漂わせる光の君。彼との出会いが、少年を変える運命の瞬間であった。

出会いと別離。そして悲しみと絶望。それらに彩られた人生を生きた少年は、一つの答えを見つける。ただそれだけがあれば、他は必要ない。最後に見つけた答えは、少年にとっての希望か、それ

とも

凄絶な運命の散歩道、それこそ一つの、運命の形。

Prologue

Prologue

「なぜか、なんて。今更すぎて言う気にもならないな」

炎がはぜて、足元に火の粉が落ちる。その間も燃え上がる焚火の炎は、闇に沈む横顔を映し出す。見えない、届かない、それでもその顔はここにある。

闇であろうとなんでであろうと、その人を遮ることなんてできはしない。

「でも、お前は問うことをやめられないのだろう。お前の悲しみ、お前の憎しみ、お前の悔恨。それはすべて、お前がなぜと問うからこそ存在している」

「さて、何のことかさっぱりだな。あんたは何だ、俺がそんなにセンチメンタルな人間だと思っているのか。失ったことを嘆いて、命を絶とうと考えるような？」

音を立てて散る火花を見つめて、彼は少しだけ笑った。

わずかに皮肉の混じる目元は、眼鏡に隠されて見えない。しかし闇の向こうのその人にわからないはずがなかった。

「誰であろうと、お前のような目にあえば」

そつと焚火に木の枝が投げ込まれる。その瞬間、火が大きくなり、闇の向こうの顔が浮かび上がった。

「そう考えても不思議ではない。お前はそれを恥じているようだが、それがお前の弱さに直結しているわけではない。そう」

浮かび上がった白い顔は、真つすぐに彼を見つめていた。優しく、温かく……哀しげに。

「お前は弱くない。だからそれを選ぶしかなかったのだろう。彼らを受けた痛みを、誰よりも間近で見たが為に。人は、心に受けた痛みだけで死ぬことができる。だから、それを越えられたお前は……誰よりも強い」

「そんなことを言つて、俺を言いくるめようつて腹か。まったく、高貴な生まれの方々の考えることは一般庶民には想像もつかないなうんざりだ。そう言いながらも、彼の目は前を向いていた。

静かに流れる夜の向こうに、小さな吐息が落ちる。所詮、言つてもどうにもならないことばかりだ。彼は今を生きていて、彼らはもう、痛みを感じることをさえできないのだから。

「寂しすぎるから、死んでしまいたいのか」

淡々と、その人は焚火を見つめていた。悲しみも苦しみもない、平淡な瞳だった。

彼の痛みなど、馬鹿馬鹿しいと言える人だ。それだけの理由も、義理もある。だからこそ見捨てられないのだということは、彼も知っていた。

「寂しいだけじゃ、人は死ねない」

膝の上に肘をついて、彼は広がる闇に目を凝らす。

いつか、消え去る日は来るだろう。手首の傷跡が消えないように、彼に降りかかった現実が消えない。どんなに泣いても、あの日には戻れないのなら、救われることはない。

そう、永遠に。その命が死を迎える時まで。生きる限り炎に焼かれ続けるだけだ。

「死ねないのは、私たちのせいかな」

「あんたたちは、そんなに俺の人生に責任を持ちたいのか。いつか消えてしまつと知っているくせに、去ろうとすると引き留める。どれだけ俺を苦しめれば気が済むんだ」

「お前は」

闇に包まれた横顔が、静かに彼を捉えていた。

心は消える。想いは薄れる。それならばせめて、手だけは離さないように。そう言いながら何度も繋いだ手は、何度も振り払われた。それでもその手を伸ばすのは、幼い子供が叫んだ言葉のせいかもしれない。

「お前は消えない。私たちが守るから。哀しくて苦しくて、耐えきれないというなら、ずっとそばにいる。手を繋ぎ続ける。でも、それでも」

闇に魅入られたように、彼の目は動かない。でも、本当に見つめているものが何なのか、その人はよく知っている。

それは、はぜた火の粉の更に向こう、命のたどり着く絶対的な答えだ。

「それでも、死んでしまいたいというなら……その時はもう、止めはしない」

その人が言える言葉は、それ以上なかった。

彼が生きること、誰よりも願っている。残酷な願いだと、気付いていながら。

だが同時に、その残酷さが彼を生かしていた。折れそうな心を、守り続けている。

「俺が生きようが生きまいが、あんたたちには関わりないことだ。勝手にいなくなった恩知らずめ、で済ませることだってできる。それをしないのはあんたたちの傲慢だ。俺の命は、本当にゴミみたいなもんなんだからな。でも」

ため息交じりに、彼は焚火に視線を落とした。

燃え盛る炎は、弱まることもなく在り続けている。けれどそれは永遠ではない。だからいつか、彼の抱える悲しみも燃え尽きる日が来るだろうか。

しかし今、彼のできる最善は、自嘲の笑みを浮かべることだけだった。

「でも……投げ捨てるには、あんたたちの心は重すぎる」

「そうか」

「そうだよ」

微笑みの気配が、焚火の中に落ちて溶けていく。

どうか、永遠がないのだとしても、今という時だけは悲しみに染まらないように。

強く願う。ただひたすらに願い続ける。

一瞬を閉じこめた想いの夜に、彼らは立ち止まっていく。

きっと、振り返ることはない。それは結局、過ぎ去るかけがえのない、想い出だから。

#1〜生きることの代償〜

第一章

「痛み の理由と絶望の温度」

……そう、それは始まりの光かも知れない。

しかし、全ては結局、通り過ぎるほどに遠い記憶と変わる。

戻れないと知る想い、届かないと気づく瞬間、そこに人何を見るのか。

誰であろうといつかの果てに立つのならば、きっと最後に気づくのだろう。

希望であり絶望でもある温度の記憶、そこに帰るなら、誰もが皆

幼子なのだ。

だから静かに眠るといい。悲しみを抱いたまま。

人は泣きながら生まれる。その意味を今、君は知ることになるだろうから

#1〜生きることの代償〜

貧乏。

アレイシス・マーシアたち七兄弟を表す言葉あるとしたら、それほど正確な言葉もない。

特別なものなど何もない、それが特徴と言えば特徴の田舎町。森に埋もれたフォステスの町に暮らす者が聞いたら、きつとためらうこともなくうなずくだろう。

それほど豊かでもない町の最底辺に位置する一家。それがマーシア家の立ち位置だった。

「今日も豆、昨日も豆。その前もさらにその前も豆。この町は一体どうなっているんだ？俺たちを豆で埋め尽くして殺そうという魂胆でもあるのか」

傾いて穴のあいた屋根の下に、不満に満ちた声が響く。

雨が降れば水に沈む台所。腐りきった床板を踏み鳴らして、アレイシス・マーシアは鍋をのぞきこんだ。

鍋、といってもそれはかつては、という言葉が付きそうな代物だ。ろくに洗っていないため、焦げだか垢だかわからないものがそのままこびりついている。それだけならまだしも、その上から豆を煮込んだためとんでもないものになってしまっていた。

だが、アレイシスが重要視しているのはそこではない。鍋に残った豆の残骸を指でそぎ落とす。そしてそれをためらうことなく口に入れ、眉を寄せる。

「不味い。町も町だが、我が家は更にどうなっているんだ。こんな

ものしかないとは、マーシア家始まって以来の不祥事だぞ」

「それはレイお兄ちゃんが食べ物を探してこないからでしょ。ウーアおばさんの家からパンを分けてもらえてたら、豆だけで済まさなくてもよかつたのに」

「なに言ってる、メリア。その言い方だと俺だけ働いていないみたいじゃないか。おばさんの家からパンを持ってこれなかったのはそう……簡単だ。予想外の展開により、交渉が決裂した。それだけのことだ」

自信たつぷりに言い切ったアレイシスは、十歳の子供らしからぬ顔で振り返った。

「このアレイシス・マーシアが、ただのおばさんに箒で追いまわされたからって、逃げ出すとでも思っているのか」

「だったらもう一度行って交渉してきたら。そうしたら豆だけじゃなくてすむよ」

「なにを言う。俺だって命は惜しい。あんな殺人的な箒の一撃を、もう一度食らおうなんて夢にも思わない」

あっさり前言を撤回した兄に、一つ下の妹メリアは少し肩をすくめただけだった。

いくらアレイシスが抜け目ないとは言っても、所詮は子供のすることだ。

同じ日に何度も『分けて』貰おうというのは無理がある。その難しさは、実質的にマーシア家の舵取りをしているメリアが一番知っていた。

「じゃあ、今日も豆の煮物ね。アスタたちが何か持ってきてれば、ちよつとは違うけど」

「あのちびどもに期待するとは、俺の立場がないじゃないか。つまり何だ。俺は弟妹より使えないという話なのか」

「そうずつと言ってるのに気付いてなかったの？ レイお兄ちゃんは家長だつて言っても、あたしたちはそれぞれ自立してるから、あんまり意味はないって」

結構ひどい言い草だが、アレイシスは眉一つ動かさなかった。

ただもう一度鍋から豆をそぎ落とすと、指についたそれを口に含んだ。

「不味い。ということだから、俺は行く」

「意味わかんないよ。だからレイお兄ちゃんをあてにならないの」
濃い茶色の長い髪を振って肩を落とした妹に、兄は何も言わなかった。

あえて何も言わなかったというより、面倒というのが近い。そもそもアレイシスは、勤勉とか真面目なんてくそ食らえという人間だった。

だが、アレイシスとしては言いたいことがないわけでもない。台所の壁の穴に向かって歩き出しながら、彼は背後の妹を振り返る。

「そうは言うけどこのマーシア家において、家長が役に立ったことなんていまだかつてあったか？　そもそもこの貧乏生活は、くそ親父が夢に向かって突っ走ったことが原因だろ」

「だからってレイお兄ちゃんが役に立たないのとは話が別でしょ。少なくともお父さんがいた頃は、毎日の食べ物に困ることはなかったんだし」

「勘違いするな、メリア。俺だってカス親父なんて死んでしまえと思っただけじゃない。つまり何が言いたいかというとな」

壁の穴に足をかけながら、アレイシスは器用に肩をすくめて見せる。

メリアはそんな兄の後ろ姿を無言で見つめていた。そういう時の兄にはなにも通じないと知っている。だからこそ視線は生温かくなるのだが。

「俺がこれから森に行つて、きのこでも採ってきてやるって話だ。ちびどもならまだしも、親父より役に立たないなんて言うなんて、俺を馬鹿にするにも程があるぞ」

「だったら早く行つて。夕飯に間に合わなかったら、お兄ちゃんの食べる豆はないよ」

「豆、豆か。どうせだから皆でハトになればいい。そうすれば文句も出ないだろう。うん」

ほとんど独り言のように言って、アレイシスは壁の穴の向こうに消える。

普通に出て行かないのは、いつものことだった。そもそもこの穴だらけの家で、わざわざ玄関を利用するものはいない。

「本当に、どうしようもないんだから。レイお兄ちゃんって」

メリアは言葉ほどは嘆きも見せないで、鍋に歩み寄る。そうして無造作にこびりついた豆を指でそぎ落とす。それはまさしくゴミのように見えた。

そんな黒ずんだ豆の残骸を見つめて、メリアはそれを口に含んだ。「……不味い。でも、食べなきゃ死んじゃうわ。レイお兄ちゃんって、そこがわかってないのよね。それに、大体」

メリアは濃い茶色の目を細めて、兄の消えた穴に視線を向けた。深き森に抱かれた、静寂の町フォステス。舞い散る落ち葉は秋の色に染まり、森の恵みは豊かに息づいているだろう。

だが、だからこそ。メリアは兄の性格のずさんさを感じずにはいられないのだ。

「大体お兄ちゃん、カゴも持たずにどうやってきのこを持ってくるつもりなのかしら。まさか一枚しかないコートで包むつもりなのか」

あるいは、ただの逃げ口上か。否定する材料も見つけられず、メリアはため息をつく。

どれほどアレイシスがいい加減だとしても、マーシア家の大黒柱には違いない。

「ホント、どうしようもないんだから」

十歳の子供に完璧な親代りを求めても仕方ない。それはメリアも身をもって知っているし、それを兄に求めるつもりもなかった。

だからマーシア家は、それぞれ自分の面倒は自分で見る。

文句を言っているのは、長兄であるアレイシスくらいのものだ。

「どうしようもないって言うのも、どうしようもないのね」

もう一度ため息をついて、メリアは鍋を持ち上げる。

秋が来れば、じきに冬が訪れるだろう。その長く厳しい時期を、どう乗り越えるか。

それが今、メリアの頭を悩ませている問題だった。

凍え死のうと、幼い兄弟が餓死しようと、この町の人間は気にも留めない。

気に留めるほどの価値もない、というより、構う余裕がないという方が正しいか。

何にしても、マーシア家は徐々に追い詰められつつあった。

秋は短い。そして冬は、幼い兄弟には無慈悲なほど長く、手を凍りつかせていく。

音もなく舞い降りてくる枯葉が、彼の茶色い髪に触れていく。

踏みしめる地面は真綿のように柔らかい。少し湿った腐葉土から立ち上る匂いは、アレイシスにはお馴染のものだった。

「きのこを採るとはいつても、毒きのこを採っても意味はない」

無造作に生えている木の根元に座り込むと、少年は柔らかい枯葉を掻き分けていく。

「何でもかんでも食べればいいという話なら、食べるものはあるけどな。でも、いくらなんでも毒きのこまで食べようとは思わない。

そこまで人生投げるほど生きてないし」

無意味に呟いてしまうのは、集中していないせいだ。

そもそも、それほどきのこが食べたいわけではない。今の季節なら、探せばいろいろ食べるものはある。木の根元を探りながら、少年は選択を間違ったかと顔をしかめた。

「エーゼリア湖で、魚と交渉した方が良かったか？ でも今更、湖まで行くのも面倒だ。第一、確実性という点できのこより劣る」

眩きながら根元を掘っていくと、何やら柔らかいものが手に当たった。

微妙にぬめる手触りに、顔をしかめた少年はそれを引っっこ抜く。粘液のようなもので包まれた傘のようなそれ。毒々しい赤い斑点があるきのこに、少年はため息を落とした。

「コウゲンベニナメコダケ、か。食べられないこともない」

「食べられるのか、その毒々しくて気持ち悪い奴が」

「食べられないことはないけど、進んで食べたいものでもない。それは美味いとか不味いとかいう話ではなく、人間としてどうかって問題……で？」

唐突に振り返りながら、アレイシスは背後に向かってきのこを投げた。

あまりにも唐突な反応に、後ろに忍び寄ってきた不審者は驚いた。だが、不審者の常として、そう簡単に逃げ出すわけもなく。飛んできたきのこをよけると、無礼千万な子供に呆れた視線を投げかけた。「危な、くはないが。いきなり不気味なきのこを投げるとはどういう見だ。このあたりの人間の挨拶はまさか、きのこを投げ合うというものじゃないだろうな」

「きのこだけじゃなく野菜も投げて欲しいのか。それとも堆肥がないのか。挨拶云々言う以前に、背後に忍び寄って脅かすのは無礼じゃないのか」

身構える子供の前で、その男は持てあますように目を彷徨わせる。そこで初めて、アレイシスはその男を真正面から観察することができた。このあたりでは見かけることの少ない、完全な黒の髪。無精ひげの生えた顔は、精悍と言っている。髪と同じ黒い目は鋭さを感じさせる。まとっている服は古びていたが、仕立ては良い。

ずば抜けて長身で、体格もいい男。彼は観察されていることに気付いて、目を細めた。

「最近の子供は、ずいぶん遠慮がないんだな」

「遠慮してほしいなら、それなりの対応をしろってんだ。いきなり

背後に忍び寄って、いたいな子供を怯えさせて何が楽しいんだよ。でかいおっさん」

「おっさ……いたいな子供が、そんな暴言を吐きまくるか。お前の親は、知らない大人にそんな口を聞いてもいって教えたんじゃないだろうな」

「そんな礼儀を教えてくれるような親だったら、俺が気味の悪いきのこを食べようかと悩むこともなかっただろうな。俺がそんな幸せなお子様に見えるんだとしたら、あんたの目は壮絶に腐っている」

想像以上に礼儀知らずな言葉を吐かれて、黒髪の男は黙った。

別に不幸の押し売りをするつもりはない。だが、アレイシスとしては親に守られる子供と一括りにされたくはなかった。

それは彼ら兄弟が、大人から守られた経験がないせいもある。大人は、親は子供を守るもの。そういう考えでは、アレイシスたちは生きてこられなかった。

「誰だか知らないけど、関係ないんだから俺に構うな。夕飯をくれるってなら別だけど」

横目で睨んで、少年は男に背を向ける。

何のために男がここにいいのかはわからない。だが、そんなことに構うより、アレイシスには夕飯の方が重要だった。

なにも収穫がなければ、また豆の煮物になる。あの塩気も何もない味を思い出して、少年は憂いに満ちた表情を浮かべた。

「おい」

遠ざかるうとした背中に、低い声が投げかけられる。

どこか怒っているような声音だった。最初は無視しようと思ったが、地面を踏みしめる音を聞いて無駄だと悟る。

仕方なく足を止めた少年は、あくまでも不遜に振り返る。

「なに？ 夕飯でもくれる気になったのか」

「欲しいなら考えないでもない。ただ一つ条件がある」

「……は？」

想像とは違う返答に、アレイシスは柄にもなく呆気にとられた。

大人なんてくそ食らえ。

アレイシスは心の中で毒づいた。次第に傾いていく太陽の下、黒髪の男は歩み続ける。

それは、少年が付いてくることを疑わない歩みだった。あまりにも確固としているので、少年は背中に蹴りを入れるのをためらってしまっ。

だが、そうと云っても不満を感じないわけでもない。だからアレイシスは毒づく。

大人なんてくそ食らえ。大人なんてくたばっちまえ。痩せ狼にでも頭から食われちまえ。

「ずいぶん楽しいことを言ってくれるな。よほど大人に恨みがある」と見える」

突然そんなことを言っ返った男は、実際かなり楽しげだった。

呟きが漏れていたことに気付いて、アレイシスは顔をしかめる。だが、それだけだ。見知らぬ男によく思われて意味があるか。むしろ毒になる可能性が高い。

その思考は結局、大人を信用できない子供のものだったが、少年は華麗に無視した。

「当たり前だろ。知り合いになる必要もないあんたに言ったって仕方ないが、親のいない子供がどういう扱いを受けるか知っているのか。知らないだろうな。知ってたらあんなことは言わない。だから教えてやるが、俺たちはお荷物ですらない。ゴミだ。ゴミを助ける人間なんていないだろ。貧しければなおさらだ。俺たちが餓死しかけても、町の人間は助けようと思わない。当たり前だよな。ゴミに情けをかける大人なんていないんだから」

一息に言っ、アレイシスはシニカルな笑顔を浮かべた。

その言葉は確かに本心ではあったが、すべてではない。ゴミにも矜持はある。だが、アレイシスを見つめる男にわかるはずもない。わかってほしいとも思わない。

「そういうことを言うのは、誰かに優しくしてほしいからか？」

「はあ！？ ふざけんなよ、優しいなんて嘘だ。上っ面だけの綺麗さで誤魔化して、何が面白いつていうんだよ。綺麗綺麗、褒め合いたいならよそでやってくれ」

「ずいぶんひんまがったやつだな。これは選択を間違ったかもしれない」

枯れ枝が、男の足元で音を立てる。その音を追いながら、アレイシスはシニカルな笑顔を少し変質させた。わずかに憎らしげな感じに。

「選択？ 何の選択だ。人生の選択なら既に間違っているだろ」

「人の人生を勝手に語るな。そもそもその言葉の根拠は何だ」

「俺に声をかけた時点で、と言えばわかるか」

男は無言だった。今までの会話で、それを確信してしまっていたからだ。

降り注ぐ枯葉を振り払いながら歩んで、男は疲れ果てたように肩を落とした。

「とんでもない子供だ。愛らしさの欠片もない」

「そんなもの期待していたとしたら、あんたはこの地域をなめているとしか思えないな。貧しい人間は、少なからず狡猾でなければ生きていけない。俺なんかまだ、話を通じる方だぞ。こうやって見ず知らずの人間につき合ってやってるんだから」

「その言葉通りだとしたら、おれはまんまと罠にはまったことになるな。まあ、ここまで来たんだから、役に立ってもらおうぞ。……夕飯を引き換えに、な」

ため息交じりに、男は腐葉土を踏みしめ歩いていく。

立ち上る少し湿った土の臭いに鼻を鳴らして、アレイシスは男の背を追う。男の歩みはしっかりしている。大股で歩き続ける男を追

いかけた少年は、そこで気付く。

気付いたと同時に駆け出していた。葉の隙間から降り注ぐ光、それを越えた瞬間。

世界が、遮ることなく広がっていった。

「……森にこんな場所があったのか」

一瞬、らしくもなくアレイシスは呆然としていた。

森が開け、涼しい秋風が少年の頬をかすめる。わずかに光を弾く小川が緑の大地を貫き、森の向こうへ流れていく。

何とも言えないほど平和な光景だった。あまりに平穏すぎる光景に、少年は何度も瞬いてしまう。小鳥が飛び、リスが走っていくその和やかな光景の真ん中で、ぼつんと、小さな幌馬車が玩具のように存在していた。

「で、ここで何をしろってんだ。でかいおっさん」

「おっさんはやめる。つべこべ言わずにちよつと待て。……ジユヌ様！ ルクセンティア！ ギヌス！ 見つけてきたぞ、事情がわかりそうな奴」

「あら、ラタツク。意外に早かったのね。あなたにしてはずいぶん手際の良いこと」

幌馬車に歩みかけた少年と男の横手から、声が投げかけられた。

その声は、ガラスの鈴を鳴らすように澄んでいる。突然の声に驚いたアレイシスの視線の先を、銀の輝きが流れていく。

「ティア、それはどういう意味だ。おれの手際の良さは折り紙つきだということを、一番知っているのはお前だろう」

「そう、あなたの不器用具合もね。ラタツク・ガランティノ、あなた今度は一体何をしたの。そんな小さな子を連れてくるなんて」

薄氷のような青い瞳を細めて、ティアと呼ばれた女性はアレイシスに視線を向ける。

その女性は、子供の目から見ても美しい人だった。柔らかいといふより凜とした雰囲気を持つその人は、男物のシャツとズボンを身にまとっている。それがひどく似合っていて、少しおかしさも感じ

だが、言うほどの違和感でもない。

つまり、見た目より機能性を重視するような人なのだろう。後ろでまとめた長い銀の髪に触れた女性を、アレイシスはそう評した。

それに気付かない女性は、そつと身を屈むと少年と視線を合わせで微笑んだ。

「あなた、こんなところに独りでどうしたの。お父さんやお母さんは一緒じゃないの?」

「一緒だったらこんなところに来るはずないと思わないのか。俺は夕飯を探しに來ただけだったのに、怪しいおっさんにここまで連れてこられたんだ。その上、両親はどうしたかとか無神経に訊かれるなんて、俺はそこまでひどいことをしたか」

「……ラタツク?」

なんだこの生き物は。そう女性の目が言っていた。

ラタツクと呼ばれた男は、関係ないというように目をそらす。ここまで連れてきておいて関係ないはずもないが、無関係を装いたくなるらしい。

アレイシスの意見はまた別だった。当然だが、そんな扱いを受けて黙れるはずもない。

「で、俺はどうしたらいいんだ? おっさんの言い方だと、何かすれば夕飯をくれるっていう話だったじゃないか」

「ラタツク、どうということなの」

「ティア、待てって! これは成り行きと言うかなんというか。とにかくおれとしても予想外の事態だったんだ。見ての通り、無邪気な子供じゃない。町の人間にいきなり訊くより、情報が取れるのではないかな」

明らかに言い訳だが、言わずにはいられない状況と言うのも確かにある。

なまじ美しいだけに、女性が目つきを鋭くすると凄味があった。

それはアレイシスには通じない類のものだが、男にとってはそうではない。

「ちょ、ちょっと待て、頼むから睨むな。おれだつてこんな子供だとは思わなくてな」

「なるほど、おっさんは俺を邪悪な子供だと思っっているわけか。そんな子供を自分の至らなさの理由に使うのだから、それなりの代償は必要だと思つがどうだ」

「……なんだかよくわからないけれど、ラタック。連れてきてしまったのだから、責任は持つべきよ。とにかくあなた、一緒にこちらへ来なさい。ラタックも」

「結局連れていくのか。あんたらも暇だな」

「……お前、頼むからちょっと黙ってくれ……」

完全に余裕のなくなった男は、肩を落としながら女性の後に続く。付いていく義理はなかったが、アレイシスは黙って二人の背を追いかけた。

正直、少年は疲れていたのだ。少しでも食べ物を手に入れる可能性があるのなら、それを逃すのはあまりにも惜しい。

二人が向かっているのは、草原の幌馬車だった。近づくにつれ、アレイシスの眉が険しく寄ってくる。その幌馬車は質素ながら、少年の目にも品と言うのもが感じられたので。

「ギヌス、ラタックが戻ってきたわ」

女性は、馬車のそばの焚火の方に向かって声をかける。

アレイシスが視線を向けると、そこには枯れ枝のように細い男が立っていた。

いわゆるローブ、というものだろうか。細い体を覆うのは、ずっと足元まで覆う長い衣だった。萌黄色のローブをまとうその男は、肩にかかる灰の髪を振ってこちらを向いた。

「ああ……そうですか。彼にしてはずいぶん仕事が早い。それで冷たい色だった。氷とは違う、焦土の後に残るような灰色の瞳だ。それが女性を見て、男に移り、そしてアレイシスを捉えて怪訝そうに細められた。」

「それで、その子供は何なのですか。ラタック、君の子供などと言

わないでしょうね」

「そんなわけあるか。こんな可愛げのないくそ生意気な子供がいてたまるか」

「酷い言われようだな。よほど俺の言葉が堪えたと見える」

「……確かに、君の子供ではなさそうだ。こんな弁の立つ子供が、君の子供のはずがない」

変な納得の仕方をしたローブの男は、じつと少年を見据える。

それはあくまでも観察者としての瞳だった。私情など挟まない、挟む余地もない冷徹な瞳だ。アレイシスとしては、かなり不本意だったが噛みつくことはできなかった。

他の二人と違って、この男は子供だからと言って容赦はしない。

少年は悟っていた。

「それで、ラタック。私の質問に答えなさい。この子供は何なのですか」

「いや、だからつまり……この子供に情報提供を頼もうと」

「この子供に？ 情報提供を？ 正気ですか。君はもう少し使える男だと思っていましたが、その認識は改めなければならぬようにですね。こんな子供の話を、ジュヌ様の耳に入れられると知っているのですか。思っているとしたら君は、ここにいてる価値はない」

「ギヌス、ちょっと。いくらなんでも言いすぎよ」

女性の言葉は誰に対してのものであったのか。なんにしても、灰色の男は攻撃を止めて、肩をすくめて見せる。

はつきり言つて、アレイシスには不快極まりない状況だった。馬鹿にするな、そう叫びたくはないかと言われれば嘘になる。踵を返さないのは、少年の性格を考えれば奇跡だ。

それはすべて、夕飯のために。夕飯、夕飯と繰り返して、アレイシスは顔を上げた。

「なんでもいいけど、訊きたいことがあるならごちゃごちゃ言つてないで訊けばいいんだ。あんたらはどうか知らないけど、俺はちゃんと見返りをくれるなら嘘はつかない。それとも何か、あんたらは

俺みたいな子供の言葉の嘘もわからないほど馬鹿なのか」

それは一步間違えば、殴られるくらいでは済まない言い方だ。

実際、灰色の男は眉を吊り上げて、一步踏み出してきた。危険だ、アレイシスは気付いたが動けない。燃え上がる灰色の瞳が、体の自由を奪い、細い手が光を放って

「 やめなさい、ギヌス」

静かな声だった。時が止まった空間に降り注ぐ、一粒の涙のような声だ。

けれど、同時に揺るぎない強さで時を支配する声だ。その証拠に、灰色の男は逆らうことなく振り上げた手を下ろした。

「 ジュヌ様……」

誰かが発した声を追ったアレイシスは、その姿を目に映した。

陽だまりのように柔らかな金の髪。白皙の美貌に輝くのは、海より深い青い色の瞳。気品と強靭さを併せ持つ気配に、少年は何も言えなくなった。

少年に微笑んで、その人はゆっくりと馬車から歩いてくる。しかし少年は動かない。

明らかに自分とは別次元の人間だと、アレイシスは瞬時に悟っていた。

「ラタック、戻って来たのだね。ご苦労だった。どうやら、最適な人間を連れてきてくれたようだ。任せて正解だったな」

「いえ……ジュヌ様。それはその」

なんとなく黒髪の男は居心地悪そうだった。

任せて正解だったと言われるには、あまりにもひどい選択だったからか。どう思ったにせよ、ジュヌ様と呼ばれた男は、不思議なほど穏やかに少年を見つめていた。

「私はジュヌ。ジュヌ・オニクス。見ての通り旅人だ。私たちは王都の方から旅してきたのだが、少し迷ってしまっただけ。もしよければ、お前の名前を教えてくださいませんか」

そう言って、ジュヌ・オニクスと名乗った男は微笑んだ。

いつもなら、名前を覚えてくれなどと言われても、素直に名乗らないのがアレイシスだ。

だが、なぜか今は反抗する気になれなかった。アレイシス自身にとっても不可解な心理だったが、人の心の棘を取る何か、ジユヌにはあった。

「俺は……」

少し、アレイシスはためらった。そう簡単に人に気を許すことは、性分としてできない。

だから名乗った名前は、少年としては最大の譲歩だった。

「俺は、レイ。……レイ・マーシアだ」

「レイ、か。良い名だ」

ジユヌは、俯く少年に優しく微笑んだ。

……それが、レイ・マーシアの始まり。

そして同時に、アレイシス・マーシアの終わりでもあった。

#2 悲劇の根源

#2 悲劇の根源

夕闇が足早に去り、夜の足音が空を覆っていく。

手の先さえおぼろげな薄闇を、焚火の炎が照らし出していた。

舞い散る枯葉の色も、今は曖昧に薄れる。遠ざかりつつある秋の気配を感じながら、少年は自分の現状を嘆いた。

「ああ、なんだって他人のために料理なんかしてるんだ、俺は」

目の前で湯気を立てる鍋からは、形容しがたい香りが立ち上っている。

変な臭いではない。だが、いつも豆ばかりのアレイシスには複雑な香りだった。

そもそも、ただのクリームシチューが、こんなに美味しそうに見えることは、いまだかつてあっただろうか。

「よだれたらしそうな顔で、文句言っつな。手が止まってるぞ。食べたいんだろ」

「誰がよだれたらしてるって言うんだよ。俺がそんなマヌケ面をさらすと思っつのか」

「さらすかどうかはともかく、手を休めてる場合ではない。シチューが焦げてもいいのか」

横で焚火の火力を調整していた黒髪の男　ラタツク・ガラಂತ
イノは、淡々と少年の言葉を受け流す。

「どうやら、アレイシスの言葉を真に受けることはやめたらしい。
わずか数時間の間に、徹底的に嫌われた少年は、それでも気にせず
お玉で鍋をかきまわしていく。」

嫌われ者というのは、アレイシスの人生の代名詞といつてもいい。
好きでやっているわけではなかったが、褒められた生き方をしてい
ない自覚はあった。

「だからどう扱われようと気にしない。気にしないのと、傷つかな
いのは話が別だったが。」

「ラタツク、あんまり火力を上げすぎないで。肉が硬くなるわ。そ
れと、低空飛行で冷戦をするのはやめなさい。ジユ又様の前よ」

「おれのせいかな？　おれのせいなのか？　このくそガキに非はない
のか？」

「あんたのせいだな。子供に罪を着せようなんて、極悪にも程があ
るぞ」

「……殴っていいか、こいつ」

「やめておきなさい。気持ちはわからないでもないけれど」

串に刺してあぶった即席のパンを持った女性、ルクセンチア・
マジエス　愛称ティアは少し冷たい微笑みで少年を見た。

好意的ではない微笑みを、アレイシスは見ないようにして鍋をか
きまわす。好意的ではない、という程度の感情なら、それほど害に
はならないと知っていた。

「殴るのではなく、燃やしてしまったらどうですか。そうすれば気分
も晴れるでしょう」

笑いだか冷笑だか判別つない声は、焚火のそばに腰かけた灰の男
ギヌス・アルビレオのものだった。

木が結晶化したような材質の杖をもてあそびながら、ギヌスは冷
徹な目を向ける。

「それとも、元素分解の方がお望みですか」

「やめなさい、ギヌス。そんな脅しを子供に言うものではない。お前たちは誤解しているようだが、この子は道理のわからない子ではないよ」

焚火の炎から少し離れた丸太に腰かけて、ジュヌは深い笑みを浮かべる。

明らかに庇われているとわかる言葉だった。だが、アレイシスは感謝も感激もしない。代わりに胸の奥に広がったのは、粘ついた黒い感情だった。

自分が汚いと知っている。けれど、綺麗なものを見せられれば、妬みは生まれる。

「なんにも知らないくせに、知った風な口を聞くな。ただの想像でそう言ってるなら、今すぐ取り消せ。人を見下した機嫌取りに耐えられるほど、俺は心が広くないんでね」

「お前……」

険しい声を出したラタツクに構わず、アレイシスはお玉を持ち上げる。

フォステスの町ではお目にかかれない、混じりけのない白のシチュー。それを指で少しすくって、口に含んだ。

「うん、ちょうど良いな。そろそろ食べ頃だ」

「よし、では夕飯にしようか」

少なからず殺気立つ空気を気にも留めないで、ジュヌは優雅に立ち上がる。

ジュヌにそうされてしまえば、他の三人が言えることなど何もない。少なからず顔をしかめたものの、夕飯に向けて行動を開始した。皿が用意され、シチューが注がれる。焼き上がったパンに、良い香りのするお茶が用意された。簡素といえば簡素だったが、アレイシスにとっては相当のご馳走といえる。

その間に夕闇は完全に遠ざかり、森は闇に閉ざされていた。

慣れている森のことだ。帰るだけならそれほど迷うこともない。

勢いよく燃え上がる焚火の前に腰かけた少年には、手にした皿の中

身の方が重要だった。

「さて、では頂こうか」

焚火を挟んでアレイシスの正面に腰かけたジユヌは、微笑みながらそう言った。

「じゃあ、頂きま」

「天の頂より降り注ぐ神の御手よ。日々の糧を与えし慈悲深き瞳よ。今日という日を無事終えられること、感謝いたします……」いきなり唱和する声に、今まさに食べようとした少年の手は止まる。

見れば、ジユヌもラタックもティアも、そしてギヌスさえも目を閉じて祈っていた。

日々の糧を与えてくれた神への感謝の言葉。それを知らないアレイシスではなかったが、正直言って彼には縁のないものだった。

日々の糧は与えてもらうものでなく、自主的に取ってくるもの。

そういう認識なので、この光景は少年には奇怪に映った。

「……気高き神、アレイシアよ。願わくば明日も穏やかな日々を与えたまえ。」

固まっていた少年を、開かれた深い青が見つめる。

少し笑うような気配に瞬いたアレイシスに、ジユヌは欲しかった言葉を与えた。

「食べて構わないよ。すまないな、付き合わせてしまって」

そう言った時にはもう、アレイシスは皿に顔を突っ込んでいた。

「動物じゃないんだから、スプーンを使えよ。スプーンを」

「別にいいだろう、ラタック。口うるさく言うことでもない」

「ジユヌ様は寛大すぎます。おれだったら一発殴ってますよ」

「おや、珍しく君と意見が合いましたね。それなら共同戦線と行きましょうか」

「ちよつと、ラタック、ギヌス。馬鹿なことを言うのはやめなさい。ジユヌ様も、笑っていないで止めてください」

外野が騒ごうが何をしようが、食べ物に対する集中は途切れない。

結果、他の四人が半分も食べない間に、少年の皿は空になっていた。そうして図々しくもおかわりを要求したのは言うまでもない。

「まったく、なんてガキだ」

ラタツクの呟きは、三皿を空にしたアレシスに向けられたものだった。

そこまで来ると、遠慮も何もない。だが、久々に満腹感を味わった少年は、そのための代償を忘れてはいなかった。

「……で、あんたらは何を訊きたいんだ。まさか可哀想な俺に、食べ物あげたくてここに連れてきたわけじゃないんだろ」

「お前の方から言ってくるとは意外だな。どうせ食い逃げするつもりだと思っていたのに」

「そうしたいのは山々だけど、そんなことしたら命が危なそうだからな。……あんたら、ただの旅人ってわけじゃないんだろ」

皿をじつと見つめていたアレシスは気付かなかった。その瞬間、ジユヌを除く三人の目が鋭くなったことに。

だがそれは、少年が顔を上げた時には消えていた。それは本当に一瞬のことだったのだ。

「さあ、とだけ言っておこう。否定しても信じないだろうからね。それで、訊きたいことというのは、レイ。フォステスの町のことなんだが」

「フォステス……？ あんな田舎町の、何が訊きたいって言うんだ」
疑問と疑惑、両方を目に浮かべて、アレシスはジユヌを見据えた。

フォステスは旅人など訪れることもまれな、本当に小さな町だ。見るものといえば、エーゼリア湖くらいのもの。だがそれだって、藻に覆われていて美しい光景とは言い難い。

だから、アレシスの疑問は当然と言える。しかし、その思考とは別の原理で動く思考があることを、まだ少年は知らなかった。

「……『スピリット・ジェイネス』。その言葉に聞き覚えはないか。フォステスの町に、そういう名を持つものが、存在していたはずな

のだが」

「すぴり……なに？ それ何の話だ？ 人の名前でもなさそうだけ
ど」

「そう、人ではない。そう聞いている。だが、それ以上はわからな
い」

「だから、俺に訊いたってわけか。でも、俺は知らないな。少なく
とも、誰でも知っているような話ではないと思う」

それは、少年にしては珍しい正直さだった。だが、ジュヌ以外に
は通じなかつたらしい。

「嘘を言っているのではないでしょうね。そうだとしたら、ただで
は済ましませんよ。私はジュヌ様と違って、子供であろうと容赦す
るつもりなどありません」

「そんな命がけの嘘なんてつかない。大体あんたら、俺みたいな子
供が知ってる情報なんて、大したものじゃないとわからないか。そ
ういうことは、年寄りとか、偉そうな大人に訊くべきことだと思っ
がどうだ」

少々どころではない憎らしさに、ギヌスはすでに寄っていた眉を
さらに寄せた。

ジュヌの前では、手荒なまねはしない。そう気付いていたから、
少年は言い返せたのだ。

「なら、レイ君……だったわね。あなたは、フォステスに住んでい
るのでしょうか？ そういうことに詳しくそうな誰かを、紹介してくら
えないかしら」

「おれもティアの言うことに賛成だ。わざわざ夕飯をご馳走してや
ったんだ。それくらいしても罰は当たらないだろう」

「それはできないな」

短く答えた少年の声は、なぜか少し歪んでいた。

それに気付かないジュヌたちではない。一瞬視線を交わすと代表
してラタックが尋ねた。

「なぜだ。できない理由があるのか」

「……ああ、言い方が悪かったな。しようと思っただらできないことはない。不可能ではないけれど、それはやめた方がいいという話なんだ」

「どういうことだ」

「どうもこうも。俺を見てわからないか」

端的な言葉だったが、大人たちはすぐに何か感じとったらしい。

聡明で、賢明な人たちだ。皮肉と、少しの諦めを込めて、アレイシスは焚火を見つめる。

炎がはせて、火花が足元に散っていく。その少しの時間で、少年は感傷を押し込めた。

「つまり、お前は町の人間に信用がない。と言いたいのか」

「わかってるんだから、もっとはつきり言ったらどうだ。俺は、フォステスの鼻つまみ者だつてな」

ためらうことなく言い切った少年は、シニカルな笑みを顔に張り付けた。

身も蓋もない言い方に、良識ある大人たちは揃って顔を見合わせるしかない。しかし、それでも否定の言葉はなかった。つまり、肯定したのと同じだったのだ。

「わかったようだ。だから話を訊くつもりなら、あんたらが直接行った方がまだましだ。間違っても俺の名前を出すなよ。その瞬間叩きだされても、文句は言えないぞ」

「そうか。わざわざ嫌なことを言わせてすまなかったな。その上で図々しいかとは思うが、フォステスの町に案内を頼めないか。近くだというのは知っているのだが、私たちはどうやら迷ってしまったらしい」

「それくらいならいいけど。その馬車も一緒に行くなら、森を大回りして街道に出ないといけないと……」

アレイシスは、空の皿に視線を落とした。案内をするなら、特別な労力はいらない。

街道への道順を頭に描いた少年に、ジュヌは静かに微笑みかけた。

「お前は良い子だな、レイ」

「は……なに言ってるんだよ。そういう言葉は、本当にたった一人でも汚れずに生きてこられるような人間にくれてやれ。俺はそんな言葉はいらないし、必要もない」

「そうだろうか。私はそうは思わないよ」

飾り気のない言葉は、強い反発心も封じ込めてしまっただろうか。

少しぼんやりと顔を上げたアレイシスに、ジュヌは変わらぬ微笑みを向けていた。

そんな風に優しく笑いかけられたのは、いつのことだっただろう。大人なんて、奪うばかりで与えてなんかくれはしない。そう思っていたから、少年は戸惑うしかなかった。

「優しくできる人間は多い。でも、優しくなれる人間はそれほど多くない」

「そんなの」

わからない。その言葉は永遠に失われた。

足元に短い衝撃が広がっていく。近くではない。だが、それほど遠くではない。

ほとんど同時に顔を上げたアレイシスたちは見た。立ち上る、その輝きを。

月明かりも差さない、漆黒のビロードのような空。

その向こうが、不自然に赤く染まっていた。夜を切り裂き、静寂を崩れさせる不穏な色。

それは次第に強さを増し、森の木々を赤く染め上げていく。

「燃えて……いる」

誰かの声が聞こえた。あるいは、アレイシス自身の心の声かもしれない。

目に映るのは、燃え盛る炎の輝き。森の向こうに立ち上るそれは、一つの事実を示す。

燃えていた。森が……そして、町が。

「みんな」

気付いたときには、アレイシスは駆けだしていた。

投げかけられた呼びかけに、彼を留める力はない。アレイシスは衝動に突き動かされるように、町へと向かって駆けていく。

もしこの時立ち止まれたなら、あるいはこの場にいなければ。

失う痛みを感じずに済んだかもしれない。だが、今となっては無駄なことだった。

少年は駆け続ける。何も知らず、何も気付かないまま。

この世界に心を焼き尽くす絶望があることも、何もわからないまま。

激しく猛る火柱が、闇色の夜空を焦がしていた。

そこには、慈悲の欠片も感じられない。森から続く町の入口に立ったアレイシスは、頬を焼く熱に立ち尽くしていた。

燃えていた、町が。粗末な木製の町並みは、一つの例外さえなく炎に包まれている。

赤く、時に青白く広がる炎は、激しさを増しながら空を貫く。果然と、アレイシスはその光景を見つめていた。

町が燃えている。それは理解できた。しかし、なぜ、という部分は、少年の全思考を持ってしても、理解できることではなかった。

「なぜ……」

呟いても、現実が変わることはない。それでもアレイシスは呟く。なぜ、なぜだ、なぜなんだ。俺たちが何をした。俺たちが

「……っ」

そばで、火柱が粗末な屋根を突き崩していく。それがもたらした轟音は、結果としてアレイシスを現実に戻した。

「メリア、ルーディ、アスタス、リリアン、セシリオ、ククリナ！」

下の兄弟の名を呼んで、アレイシスは炎が舞い散る町へと走り出

す。

町は、炎に包まれ崩れつつあった。でこぼこした石畳に、炎が巻きついた柱が倒れる。それが少年の頬をかすめ、熱が呼吸するたび喉を焼く。

炎が町を焼く音だけが、鼓膜を震わせる。町を走り抜けながら、アレイシスはわずかに疑問を感じていた。

あまりにも静かすぎる。人の気配が全くないのだ。こんな状況だというのに、なぜ。

「……でも今は」

次第に激しさを増す熱波をかくぐり、アレイシスは自分の家に続く階段を駆け上る。

町の中心から離れた、高台にある傾いた家。炎から辛うじて逃れた自分の家に、少年は少しだけ安堵の息をもらす。

こんな状況でも、信じていたのだ。自分の家族だけは、何があっても大丈夫だと。家に近付くにつれ流れてきた鉄錆の臭いの意味を、考えることもなく。

わずかにもれる光。その光に導かれるように、入口へ駆け込んだアレイシスは見た。

「え……？」

すべてが、赤かった。壁も、天井も。視界のすべてが赤で染め上げられていた。

誰か赤ペンキでもぶちまけたのか。ありえないと知りつつも、思考は違う方向を向く。

否、本当はわかっていた。室内に満ちる濃厚な錆びた鉄のような臭い。胸焼けがしそうな臭いにふらつくと、ぬるりとした感触が靴を滑らせた。

「……………」

見たく、なかった。逃げ出せるなら、逃げてしまいたかった。でも、そうしたところで何も変わらないと、アレイシスは気付いていた。

ゆつくりと、緩慢に視線を落としていく。想像した光景が、なければいい。そう願いながら、ゆつくりと。次第に視界を埋めていく赤に、少年は崩れ落ちそうになる。それでも、急き立てられるように、視線を落として

「っ！ あ……ああ」

悲鳴は、不恰好につぶれた。両手で頭を覆って、ふらつきながら一歩下がる。そうするしかなかった。それ以上、何ができるといえるのだろうか。

逃げられない視線の先に、血の池があった。血だまりなどとは言えない大量の血液が、腐りかけた床板の上に広がっている。

その中に、いくつもの体が沈んでいた。何人分かなどわからない。ある腕はちぎれ、ある足は切り裂かれ、胴体すらも叩き切られていた。

「お前たち……なんで……」

冷静さは、すでにアレイシスの中から零れ落ちていた。ふらふらと血の池に向かって、幽鬼のように歩きだしていく。

足元で、血がはねて音が響く。それでもアレイシスは止まらない。虚ろに光景を映し出しながら、床に横たわる兄弟たちの残骸を一つひとつ拾い上げる。

「アスタス……」

目を見開いたまま、胴から切り離された小さな頭。七人兄弟の真ん中で、一番行動力もあつた弟だった。がめついくらいにしっかりと立っていて、アレイシスとはよく喧嘩になった。

でも、もう何も言わない。冷たくなった小さな頭をなでて、アレイシスは歩み続ける。

「……セシリオ」

恐怖の表情で目を閉じている弟は、左足がなく肩から斜めに切り裂かれていた。下から二番目の、一番甘えん坊だった弟。アレイシスが邪険にすると、すぐ泣いていた。

だけど、もう泣くこともない。血を吸った茶色の髪に触れて、少

年は歩んでいく。

「ルーディ、リリアン……」

折り重なるように倒れた弟と妹は、背中を一突きにされ、その上で両腕を切り落とされていた。すぐ下の弟ルーディは一番優しい性格で、引つ込み思案なリリアンを気にかけていた。二人ともアレシスが怠けていると、こつそり悪戯をしかけてくることもあった。

でも、その楽しいな笑顔を見ることはない。そつと顔を覗き込んで、歩き続ける。

「ククリナ」

虚ろに宙を見つめる幼い瞳は、何もわからなかったのだろう。胴を一太刀で切り裂かれた一番下の妹。親の顔を知らない上、こんなひねくれた兄が親代わりだったというのに、天使のように純真だった。アレシスが寝ていると、小さい手で毛布をかけてくれた。

しかし、二度と駆け寄ってくれることはない。指先で瞼を閉ざして、歩いていく。

「メリア……」

メリアは、台所のすぐ近くで倒れていた。夕飯の準備をしていたのだろう。色あせたエプロンに散る鮮血が、あまりにも痛々しかった。

服に血が付くのもかまわず、アレシスはそばに膝をつく。閉ざされた目は、もう開くことはない。涙は出なかった。悲しみも、凍りついてしまったかのように動かない。

「メリア……なんで」

老人のようにかすれた声だった。震える手で触れた茶色の長い髪は、まだ温かい

「……おにい……ちゃん」

青白い瞼が震え、血の気を失った唇がかすれた音を出す。

聞き逃してしまいそうな、本当にかすかな声だった。けれど聞き間違いないような、いつも聞いていた妹の声だった。

「メリア……？ メリア、俺の声が聞こえるのか」

「お兄ちゃん……帰って来た……んだね……おかえり……」

「馬鹿！ そんなことどうでもいい。しっかりしろ……！」

血にまみれた小さな体を、アレイシスは抱き起した。元々小さく軽い子供だったが、メリアはさらに軽くなっている。心は凍りついていたが、思考は答えにたどり着く。

……抱き起したメリアの体には、右腕と左足がなかった。

「レイお兄ちゃん……パン、貰えたよ……」

「メリア、メリア、しゃべるな」

「豆だけじゃなくて……干し肉も……ふふ、アスタスたちが、持つて……来たんだよ。すごいでしょ……ご馳走だよね……」

流れ出る血は、燃えるように熱い。うわ言のように呟くメリアの声は、次第に細く弱くなっていく。半分だけ開かれた瞳は光を失い、虚空を漂っている。

「ねえ……おにいちゃ……ん」

「いいからしゃべるな」

「あたし……死んじゃうのかな……」

恐怖も何もない、事実を確認するような声音だった。微笑みながらそんな言葉を言う妹に、兄は震える手で肩を掴んだ。

「お前は死なない。俺が助ける。俺が必ず助けてやる。だから馬鹿なことを言つな。そんなことを考えるな。メリア……っ！」

「ふふ……お兄ちゃんらしい、ね。いつも……無茶苦茶で……でも、そういうところ……嫌いじゃなかったよ……」

「なに言ってるんだよ。お前、そんな素直な性格じゃないだろ。それじゃ、まるで……」

お別れ、みたいな。

言葉を詰まらせたアレイシスに、メリアは微笑んだ。

それは、透明で汚れがなくて、今にもかき消えそうなほど儂い笑みだった。こんなの、メリアの笑い方じゃない。

いつも明るくて、真っすぐな癖に皮肉っぽくって。一筋縄ではないかない眩しさが、兄弟たちを照らしていたのに。

どうして、こんな風に消えていかなければならない？

「ここで、お別れみたい……ね。お兄ちゃん……あたしたち、もういなくなるけど……お兄ちゃん強いから……一人でも、大丈夫だよ……ね。レイお兄ちゃん……」

「メリア……！ メリア、逝くな、逝くなよ！ 俺を」

俺を、置いていかないでくれ。

叫びは、呟きにさえならなかった。消えていく命を必死で抱きしめて、アレイシスは繰り返す。逝くな、と。でも、メリアは微笑んで兄に告げた。

「さよなら……レイお兄ちゃん。生まれ変わるなら、また一緒に……」

言葉は、戻らない時の向こうに消えた。

力を失って、重みを増した妹の体。瞼は緩やかに降りて、瞳は閉ざされる。もう、何も言葉を語ることはない。

命は、届かない彼方に失われてしまった。二度と、戻ることはない。

「なんで……こんな」

微笑みだけを残した妹の顔を、アレイシスは呆然と見下ろしていた。

痛みは、感じなかった。すべてが壁の向こうの光景のように曖昧にしか感じられない。

それならいつそ、すべてを忘れてしまおうか。動かないメリアをそつと床に横たえようと、アレイシスはふらふらと台所に進んだ。

そこには、まだ生きていた時間が残っている。古びたテーブルの上には、薄汚れた鍋と食べかけの干し肉。そして一切れのパンが置かれていた。

皆、戻ってこないアレイシスのために残しておいたものなのだろう。テーブルに歩み寄った少年は、無造作に置かれた果物ナイフに目を当てた。

家族は、もう誰もいない。悲しみは不思議とわいてこなかった。

胸の中に大きな穴が開いたように、冷たい風が吹き抜けるだけだ。ナイフを手にとつて、じつと刃先を見つめる。そんなことをしても意味はないと知っていた。でも、それ以上の思考を心が拒む。

「……終わらないのか」

一つ、呟いた。遠くで、何かが崩れる音がする。炎が近付いてきていた。それでも少年は動かない。動くことに意味があるのか、それすらもわからなくなっていた。

立ち尽くしながら、台所の穴の先をアレイシスは見つめる。空を焼く激しい炎は、町を焼きつくそうとしていた。それならば、ここで終ろうか

そう少年が考えた時だった。その声が聞こえてきたのは。

「……残っているのは、この辺りだけか」

「はい、住人はすべて始末しましたよ。まあ、この様子じゃ生きていてもどうしようもないと思いますけどね」

「そもそもこんな町、消えても気付かれないと思うけどねえ。奴らも、徒労だつて思うだろう。ご苦労なこつた」

「……そうは言つても……不確定要素は潰しておくべきだ。前のように……邪魔が入るとも限らん……」

そつと穴の縁まで歩み寄つたアレイシスは見た。

燃え上がる炎を背に立つ、四人の黒装束の人間を。

「とにかく、生き残りがいれば始末しろ。余計な事を喋られては困る」

頭から足先まで、黒い装束に包まれた人間たちはほとんど見分けがつかない。

だが、そんなことはアレイシスにはどうでもよかつた。わかつてしまったから。

この人間たちが、フォステスの町を焼き、兄弟たちを殺したのだと。

「お前たちが……」

ゆらりと、音もなく穴を乗り越えた。そんな少年に、黒装束たち

はまだ気付かない。炎を見つめる彼らの背後に歩み寄った少年は、手にしたナイフを振り上げた。

「お前たちが皆を殺したのか」

低く響いた子供の声。一人が気付いて振り返った時には、すでに少年は動いていた。

一番近くにいた細身の黒装束の背を、斜めに切り上げる。刃先から伝わる不快な感触にも、アレイシスは眉一つ動かさなかった。

ナイフで付けた傷はそれほど深くない。だが飛び散った血が、青白い子供の頬を染めた。

「こいつ……やりやがったな！」

怒声が響いた瞬間、アレイシスの体は弾き飛ばされた。

何が起こったのか理解できないまま、少年は階段から一気に転げ落ちる。

全身を打ちつけながら、一番下まで落ちたアレイシスは、痛みに呻いた。涙なんかでないと思っていたのに、目に涙が滲みそうになる。息が詰まり、全身が痛い。

それでも何とか身を起こしたアレイシスの目に、何かが入った。

「あ、うう！」

それは液体だった。上から降り注いだそれは、目に入った瞬間、焼けるような痛みをもたらす。体の痛みなど吹き飛ばす激し痛みに、アレイシスは悲鳴を上げた。

耐えられる痛みではない。それでも悲鳴を押し殺した少年に、嘲笑が降り注いだ。

「痛いだろう？ 人の体に傷をつけてくれたんだから、それくらい当然だよな？」

簡単には死なせないよ。愉しげな声に、アレイシスは悟った。

自分も殺されるのだと。兄弟たちよりも残酷に、思いつかないほど残酷な方法で。

きつと、アレイシスはもう生きられない。ならばせめて、自分の生の終わりは

「 ! 貴様、待て! 」

誰が待つか。心の中で嘲笑って、アレイシスは炎に染め上げられた町を走り出す。

目は、膜がかかったようによく見えない。痛みは全身を侵食し、動くことも苦痛だった。

それでも、アレイシスは走り続けていた。すぐに追いかけてくる足音が聞こえたが、それを遮るように燃える家が崩れて道を閉ざしていく。

それはまるで、行きなさいと言っているような光景だった。アレイシスは不思議な現象など信じない性質だが、今は素直に信じられる。

それは、自らの終わりを自覚した者の感覚だったかもしれない。なんにしても、アレイシスに、未来など残されてはいなかった。

炎に包まれた町並みは、いつしか遠ざかる。すでに、目はほとんど光景を映さない。

それでもアレイシスは走っていた。記憶の中の光景を辿るように、真つすぐに。

そして、辿り着く。光のない、真つ暗な世界。かすかに揺れる水音だけが、アレイシスに存在を教えていた。

「エーゼリア湖……か」

静かだった。目が何も映さないだけでなく、もともところは光がなければ何も見えない。

ゆっくり歩んで、アレイシスは水際に立った。冬に近付き、夜に冷やされた湖水が、ぼろぼろの靴にしみこむ。けれど冷たくはない。ただ、体中が寒かった。

「もう、誰もいないなんて、な」

言葉に出してみると、なんとなく陳腐な言葉の気がする。でも、現実だった。そう思っても、涙は流れない。哀しくないはずはないのに、壊れたように感情は空ろだった。

でも、もうそれも終わりなのだろう。見えない背後で、足音が響

いてくる。

そつと、アレイシスは微笑んだ。なぶり殺しにされるくらいなら、せめて自分で幕を下ろそう。そうやって、握ったままだったナイフを持ち上げ

「　　待て！」

待たない。応える代わりに、手首をナイフで切り裂く。

そうして深い湖面に、少年はためらうことなく飛び込んだ。

#3 遺されることの罪悪

#3 遺されることの罪悪

……レイ、レイ……。

誰かが呼ぶ声に、少年は俯いた顔を上げた。

目の前には何もない、夜色の世界が広がっている。いつからここにいたのか、少年は思い出せなかった。けれど、そんなことはどうでもいい。

すべてに、疲れてしまっていた。もう一步も歩めない。ただ、全身がひどく寒かった。

……レイ、悲しいの？

悲しいのか、俺は。ぼんやりと思考で、夜の世界を見上げる。

光などなくても、かつての少年は生きていける気がしていた。失うものなど、何一つないと思っていた気さえする。しかし、それは間違いだったと、今はわかっていた。

失ってはいけない、失いたくないものはずっとそばにあったのだと。近すぎて、失うなど夢にも思わないで、過ごす日々を疎んでさえいた。

悲しいんだ、俺は。感覚のない体を抱きしめ、少年は震える。寒

い、凍えてしまいそうなほど寒い。でも、もうそばで温めてくれる家族はいなかった。

それに思い至って、少年は夜の世界でうずくまる。体中の力が抜けていく。こんなに強くて、底の知れない空っぽの感情を、彼は知らなかった。

ああ、これが絶望というものなのだろうか。虚ろな瞳で夜色の世界を見て、少年は壊れたように笑う。このまま壊れてしまいたい。そう願うように。

……レイ、泣かないで。

泣いてなんかいない。夜のような世界に、眩きのような声が溶けていく。

少年は、泣くことはしなかった。悲しいと感じていても、泣けない。本当に苦しかったのは、本当に泣き叫びたかったのは彼ではないから。

しかし、そうするべき彼の家族は、もう声を上げることさえできないのだ。

……泣かないで、レイ。悲しい心は、わたしが半分持って行くから。だから泣かないで。

そつと、胸の奥にしみこむように、声が夜の世界に降る。うずくまった少年が顔を上げると、微笑むようなすかな気配が世界に満ちた。

……レイ、わたしはずっとあなたを見ている。最後までずっと、ここにいるから。

だから。微笑みの気配が、少年を包み込む。

温かい、人の手のぬくもりのようだった。もうほとんど覚えていない、母の優しい手はこんな感じだったろうか。ぼんやりとした瞳は、ただ夜の色だけを映す。

けれど、包み込む気配はそばにあった。そこでふと気付く。もしかすると何も映していないのは、世界ではなく、少年の目ではないのかと。

でも、ここでは意味のないことだ。少年は包み込むぬくもりに、そっと身を任せる。

……だから、わたしと約束しましょう。それがあなたを守る、永遠の契約になるから。

耳元で、その声は囁く。壊れかけた心には痛い、残酷な言葉を。でも、今は受け止められる気がした。少年は包み込む温かさに、そっとうなずき返す。

そうすると、優しい笑みの気配が降り注いだ。なにかかもを許す、それは愛情のような。

……レイ、きつと、あなたと一緒に連れていく。

何を。その言葉は声にならない。

遠ざかる温かな気配。それは離れていくのでなく、内に染み込んでいくようにも思えた。

瞼を開いた気がした。

気がしただけで、本当は開いていなのかもれない。少年が見たのは、闇だけだった。

夢を見ているのか。ぼんやりとしたまま、闇を見つめる。何度瞼を動かしても、光景は変わらない。ふと、今は夜なのかもしれない。そう考えてみたが、何か違う気がした。

夜だとしても、こんなに真っ暗になるものだろうか。

月明かりもない夜なら、あり得るかもしれない。あまり経験はなかったが、かなりの田舎町であるフォステスなら、まったくないとも言えなかった。

そこまで思い巡らして、少年の中に違和感が生まれる。

今が夜なら、そばに兄弟たちの気配がないのはどうしてなのだろう。

寒くなってきたこの時期、身を寄せ合って互いを温めるのが常だ

った。

それなのに、なぜ。疑問が明確になった瞬間、少年は記憶が覚醒する音を聞いた。

……空を貫く紅蓮の炎。燃え上がる町並み。埋め尽くす鮮血。切り裂かれた兄弟の体。

悪夢よりも鮮やかに、その光景は頭の中に再生される。現実だとは信じられない、しかし現実でしかない光景。押し寄せる恐怖と絶望に、少年は狂ったように叫びを上げた。

感じられなかった感情の代償のように、その光景は心を責め立てる。嫌だ、そう繰り返しながら、暗闇の世界で無茶苦茶に両手を振り回した。

その瞬間、全身に痛みが走る。けれど動きは止まらない。そうしなければ、今にも心が崩壊して、自分が消えてしまいそうだったから。

けれど、その動きは途中で止まる。暗闇の中、誰かの手が強く少年の手を掴んだ。

「まだ動いてはいけない。傷口が開いてしまう」

「……ひっ！」

誰かがいた、それは少年の心を落ち着かせはしない。

生まれたのは、崩壊寸前の恐怖だった。完全な恐慌状態に陥った少年は、掴んだ手から逃れようともがく。だがその手は、さらに力を込め、暴れる子供の動きを封じた。

「大丈夫だ。もう、お前を傷つけるものはいない。だから、安心していいんだ……レイ」

レイ、そう呼ばれて、少年は一瞬動きを止めた。

その名を呼ぶのは、本当に近い者だけだ。だとしたらこの手の主は、少なくとも少年が誰か知っている。

「……あんたは……」

誰だ。その声は呟きにさえならなかった。けれど、手の主には伝わったらしい。なだめるように力を緩めて、暗闇の世界に声を落と

す。

「私は、ジュヌだ。ジュヌ・オニクス。フォステスの森で会った、旅人だよ」

「ジュヌ……？」

おぼろげだった記憶に、光が当たる。その記憶はまだ、壊れる前の心の中にあつた。

穏やかな森の世界、そこにいた彼がなぜ、そばにいるのか。

わからなかった、なにもかも。今の状況でわかっていることなど、何一つとしてない。

けれど、少年の心に残った最後の矜持が、完全に壊れるのを留める。狂って自分の内を漂うことを選ぶには、少年は強く、臆病すぎた。

「フォステスの町は……どうなった？ 皆は……」

「今は、何も考えなくていい。レイ、お前は疲れすぎている。もう少し休んでいろ」

一瞬ためらった言葉の間で、少年はすべてを悟った。

ああ、そうなのか。淡々と、考えていた。心はぼろぼろで、これ以上傷つくことなんてない気がする。でもきつと、その想いは間違いだ。

「なあ……それなら一つだけ訊いていいか」

「なんだ？」

その声は、とても優しく耳をかすめる。普段の少年なら、反発したであろう優しさ。

けれど今となっては、その優しさの意味を考える力もなかった。

悲しみは、遠退かない。

「今は……」

「うん？」

「……今は、夜なのか」

もう、本当は気付いている。でも、答えを聞くまでは、幻想でも縋っていたい。

ジュヌが、息を詰める気配がする。すぐには返らない答え。それがすべてを語っていた。

「今は……昼だよ」

その言葉は、傷ついた心に深く突き刺さった。

体から、力が抜ける。もう、声を出すことさえ叶わない。

ああ。少年は虚しい心に吹く風の只中で思う。ああ、そうなのか。

……俺は、本当になにもかも、自分の光さえ、失ってしまったんだな。

生まれてきてくれて、ありがとう。

なんて、他人はもとより、両親にさえ言われたことはなかった。

少年には、愛された記憶というものが存在しない。元々いい暮らしはしていなかったが、次々兄弟が生まれたせいで、加速度的に貧しさは増した。

それでも、父親がいた頃はまだまじだったように思う。けれど少年が七歳になる直前の春だ。一番下の妹が産まれるのを待たず、父親はフォステスの町を出て行った。

王国を侵食する幻魔を倒して、英雄になるのだと。少年ですら馬鹿らしいと思うようなことを夢見て、父親は簡単に家族を捨てたのだ。

そもそも少年は、幻魔が何か知らない。知ろうとも思わなかったけれど父親は違う。父親は田舎町の人間にしては、世情に通じていたし、あまり認めたくないが頭もよかった。

けれど親としてはどうだったのだろう。暗闇の中で膝を抱えながら考える。悪い人間ではなかったはずだ。でも親としては、あまりにも無邪気で、どうしようもなく子供だった。

だから、家族を捨てることに罪悪感を覚えるはずもない。親にな

つてはいけない人間は、確かに存在すると少年は思っている。

愛情の欠如とか、そういう根本的な欠陥がなくても。親になりきれず、子供のまま止まってしまふ人間も、少なからずいるのだ。

そういう人間を、伴侶に選んでしまった母は、ある意味一番の被害者かもしれない。夫に捨てられたと信じられず、帰ってくるのを待っていた。そして子供を産んで、死んだ。

彼女は純粋な女性だったと、少年は思っている。誰よりも、子供たちなど目に入らないほど、夫を愛していた。

いつまでもどこまでも、彼女は一人の女だったから。少年に、母という人間は始めから存在していなかった。愛情の寄る辺は、求めずもすり抜ける蜃気楼でしかない。

そんな両親でも、子供にとっては必要だったのだと言ったら、馬鹿らしいだろうか。

少なくとも、彼らがいた頃は貧しくとも人並みの生活を送れていた。だが二人が消えた瞬間、少年たち兄弟はどん底に叩き落されることになる。

生きるためなら、なんでもやった。町の人間は、幼い兄弟を養うだけの力はない。助けない代わり、度を越さない限り彼らのやることに目をつぶったのだ。

なんとという隣人愛。痛む左手首をきつく握りしめ、少年は笑う。どいつもこいつも最低だ。その最低な人間の中には、彼自身も含まれていた。

「……ジュ又様、あの子供をこれからどうするつもりですか」

近くではない、扉越しで話しているような声だった。心の狭間を覗き込んでいた少年は、光のない目を前に向ける。相変わらず、何も見えない。でも、声には聞き覚えがあった。

「まさか、連れていくなんて言いませんよね？　いくらなんでも」
それは、太く低い男の声だった。腹の底から響く声には、わずかに困惑が滲んでいる。

「ラタツク、お前が何を言いたいかわからないわけではない。だが、

それに対する答えは否だ。私がそんな残酷なことをできる気性でないことは、お前が一番知っていると思っていたが」

「それは……しかし！」

「今回ばかりは、私もラタックに同感ですね。あんな薄汚い子供を、我々が保護しなければならぬ道理はない」

言葉に詰まったラタックの声にかぶさるように、冷たい男の声音が響く。

それが当然と疑われないような、確固とした声だった。感情が混じらない分、揺るぎない強さで場を支配する。

「ギヌス、そんな情のないことを言うものではない。お前が情で動くことはないと知っているが、あえて言う。あの子を見捨てれば、私たちはあの子の家族を殺した者たちと、何ら変わらない。……わかるだろう」

「ジュヌ様のお心は優先したいとは思いますが。だが、私はあの子供に価値を見いだせない」

「わたしは……ジュヌ様に賛成です。少なくともあの子供の状態では、生きていくことさえできないわ。一度助けてしまった以上、責任を持つのは大人として当然のことでしょう」

「ティア……そうは言うけどな。おれたちだけでは、今の状態でも手一杯だ」

困惑した低い男の声に、少年は腕に込める力を強めた。

左手首には、ナイフで切り裂いた傷がある。最初は痛みを感じなかったのに、握りしめるたび燃えるような激痛をもたらす。血も出ているかもしれない。

しかし、光の失われた目には、その赤い色は映らなかった。その方が楽な気がする。

見えなければ、あの残酷で冷たい色を、思い出さなくて済むから。「確かにラタックの言うこともわかる。あの目は、ただ医者に見せたからと言ってどうにかできる類のものではない。だから、彼女に頼ろうと思う。彼女なら、少なくとも今の絶望的な状態を、打破で

きると私は考えている。皆はどう思う」

意見を求めているような言葉だが、実際はそうでない少年は気付いた。

人に命令することを慣れている者の話し方だ。ぼんやりそんなことを考えながら、少年は幽霊のように立ち上がった。

「彼女……まさか、エルローズ・ファンシア、ですか？」

「そうだギヌス。彼女の治療法術なら、あるいはあの子の目も直せるかもしれない」

「正気とは思えませんね。ジュヌ様とは思えないお言葉です。あの子の危険性を指摘されたのは、他ならぬジュヌ様ではありませんか。にもかかわらず、あの子に頼ろうなどと！ 私は反対です。あの子の価値以前に、代償が大きすぎる」

棘を含むギヌスの声を聞きながら、少年は両手を伸ばして足を進める。

広い部屋なのか、ふらふらと進んでも引つかからない。完全な闇の中では、普通に歩くことなど不可能だった。それでも手が壁に触れると、少しだけ落ち着いた気がする。

気がしただけで、実際は顔も心も、固まったように動かなかったが。

「だが、それ以外方法はない。あのまま放っておけば、体より先に心が死ぬ」

「だとしても、私は賛成しかねる。私にとって重要なのはあの子供などではなく、ジュヌ様、あなただ。そのあなたを危険にさらすかもしれないことを、私が了承すると思いか」

「ギヌス！ ジュヌ様になんてことを言うんだ！」

「構わない、ラタック。それより……ギヌス・アルビレオ」

壁伝いに歩くと、突き出した何かに触れる。

手でなぞると、それは木の枠だとわかった。そのままゆっくり手を伸ばしていくと、指先に冷たく滑らか感触が伝わる。

「……お前の主は、誰だ。このジュヌ・オニキスの言葉に従えない

のなら、今すぐ去れ」

ギヌスの声音など、軽く吹き飛ばすような厳格な声だった。

一瞬息を飲んだような沈黙が、少年の背にぶつかって消える。

少年は、指先の感覚で触れているのが窓だと理解した。そしてふと、小さく笑う。

……ここは、一体何階だろうか、と。

「ジユヌ様、私を切り捨てるとおっしゃるのですか。あんな子供のために」

冷たく凍っていたギヌスの声音が、わずかに熱を帯びる。壁だけが扉だかに隔てられても、かすかな震えがはつきりと伝わってきた。

なんだか、自分の話には関係ない話の気がする。関係ないはずもないが、手で鍵を探って窓を開いた少年には、ほとんどが認識の外にあった。

「……目の前のただ一人も救えずに、万の民を救うことができようか」

どこか超然とした声に、少年の動きは止まる。穏やかなのに、たとえようもなく深い声音だった。開いた窓から、少年の体には冷たすぎる風が吹き込んでくる。

ジユヌの声はまるで、その風のように冷たく尖っていた。

「私は父上ではない。もちろん兄上とも違う。彼らの轍は踏まない。相手がたった一人であっても、この国の民だ。あの子を見捨てるのなら、私がここに立つ意味はない」

ジユヌの声だけが響いた。他の誰も、口を挟むことはできない。

まるで王様みたいだな。窓枠に足をかけながら少年は思う。ジユヌが王様、結構似合っているかもしれない。よく知らないけど、なんとなくそんな気がした。

「私の言葉が絶対だと言うつもりは毛頭ない。だからギヌス、選べ。私にこれからも従うのなら、エルローズに連絡を取れ。それができないというのなら、ここでお別れだ」

「ジユヌ様……」

苦渋に満ちた顔が浮かぶような声だった。何を言っても、ジユヌは動かないだろう。

少年にもわかるのだから、ギヌスにわからないはずがない。低く轟く唸り声を聞きながら、少年は窓枠に両足を乗せる。

風が、吹き抜けて頬をかすめていく。風に混じるざわめきは、ここがすでに森の中でないことを教えていた。

「ジユヌ様は、相変わらず酷な方ですね。私にそんな選択をさせるとは。本当に酷い」

「そんなことを聞きたいわけではない。ギヌス、明確な答えを示せ」「そうですね。まどろっこしいのは性分ではありませんから」

冷たい笑みが浮かぶような声を聞きながら、少年は窓枠の上で見えない世界を見つめる。

もう世界には何も無い。あるとすれば闇だけだ。永遠に逃れられない、終わりのない夜。

少年は、ただ笑った。失うことの意味など、知りたくなかったというように。

遺された者の罪悪は、逝った者の後を追うことだろう。だとしても、もうどうでもいい。

「私は」

声が背中にぶつかった。でも、少年はそのまま前のめりに倒れる。飛ぶように、解き放たれるように。少年は、暗闇の世界で落ちていった。

#4 ー いきたいなんて思わない

#4 ー いきたいなんて思わない

少年は、ふらふらと暗闇の中を彷徨っていた。

ここが今どこなのか、彼は考えることもない。ただ少なくとも人の気配のそばを、夢遊病者のように歩き続ける。

裸足の足は、冷たく舗装した道の上を進んでいた。けれど、その感覚は鈍りつつある。

ああ、いつそのこと何も感じなくなればいい。投げやりよりも無造作に考えた瞬間、肩が何かにぶつかって、少年は倒れ込んだ。

「おい、くそガキ！ 気をつける！」

「……………」

浴びせられた罵声を、他人事のように少年は聞いていた。

倒れた時打ちつけた頬が痛む。痛みはすでに全身を蝕んでいたが、それでも新たな痛みは空ろな意識に響いた。

その痛みの軌跡を追う少年は、倒れたまま動かない。冷たい石の感触が、熱を奪う。

罵声が繰り返し降り注いだ。少年は動かなかった。本来の少年なら、一言どころでなく言い返していたら。だが、今となってはすべて過去のものだった。

そのうち短い舌打ちが聞こえて、苛立つ足音とともに気配は遠ざかっていく。

それでも少年は石の道に横たわり続ける。立ち上がる必要があるのか。それすらもわからなくなりつつある思考に、少年は口元をゆがめた。

「……あなた、大丈夫？ 具合でも悪いの？」

品の良い女性の声が、ためらいがちにかけられる。

放っておけばいいのに、どこにでもお節介な人間はいるんだな。

そう思ったが、少年は何も言わなかった。声を発することすら、心が拒絶する。

そばに誰かが座り込む気配がした。そうなくても少年は動かない。さっさと消える。そう心の中で繰り返しながら、自分が見捨てられることを望む。

けれど、お節介な誰かは消えない。何度も声をかけながら、少年を覗き込む気配がして、そうして次には

「ひっ！」

肩に手が触れた瞬間、少年はその手をはねのける。どこにそんな力が残っていたか、不思議なほど激しい反応だった。

そして必死で横に転がり、身を起こすと、震える足取りで道を走り出す。

「あなた、お待ちなさい……！」

慌てた声に、悪意は感じなかった。けれど、少年は立ち止まることも、振り返ることもしない。永遠の夜の世界を、震えながら駆けていく。

怖かった。誰かにぶつかり、毒づかれる。傷つけられるのなんて平気だったはずなのに。倒れ込みそうになって、心配そうな声が降る。触れられると、消えない傷が血を流す。

何度もぶつかって、倒れ込みそうになりながら走り続ける。一度ならず殴られそうになり、何度も気遣う声をかけられた。それでも夜の世界は消えていかない。

何も無い暗闇を、少年はたった一人で駆け続けていた。

いつまでそうしていただろう。息が切れ、裸足の足が痛む。全身が切るように痛んだ。もう耐えるのも限界だった。ついに立ち止まった少年は、その場でうずくまる。

いつの間にか、ざわめきは遠ざかっていた。どうやら路地にでも入り込んだらしい。そう気付いた少年は皮肉交じりに呟いた。

馬鹿らしい。呟きはかすれて音にはならない。それでも少年は繰り返す。馬鹿らしい。こんなことをしても何の意味もないのに、と実際、ここにいることに意味などないのだろう。ジュ又達から逃れても、少年に行く場所があるわけもない。冷たい地面に座り込むと、無性に叫びたくなかった。

なぜ、どうして。力のない手が地面を打つ。なぜこんな風になるしかなかったんだ。もう一度、地面に手を叩きつける。なぜ、なぜだ、なぜなんだ。

そんな問いは無意味だと、わからない少年ではなかった、しかし、理解と納得は別だ。

手が痛い。手首の傷が疼く。全身が裂けてしまいそうになる。どうせなら、全部壊れてしまえばよかったのに。そう思っても、少年の現実は変わりはいしない。

「なぜ……」

かすれた声が、闇の世界に閉ざされて消える。何度も問いかけても、誰も答えない。当然だ。少年の求める答えは、この世界にはないものだから。

それならば、少年の想いはどこに行くのだろう。夜の視界の中で、少年は顔を上げた。

いきたくないなんて、思わない。生きること死ぬことも、選ぶにはもう遅過ぎた。

少年はふらふらと立ち上がると、見えない空を見上げた。今は晴れているのか、曇っているのか。それとも昼なのか夕方なのか、もしくは夜なのか。

そんな簡単なことさえ分からない。今更ながらに失ったもの大きさに気付いて、少年は自嘲するように唇をゆがめた。

「馬鹿だな、俺は」

「こんなところでどうしたんだい？ 坊や」

突然、背後で男の声が響いた。

反射的に、少年は背後を振り返った。当然だが、あるのは完全な闇だけだ。ただ、正面から、絡みつくような粘性を含んだ視線を感じる。

「おやおや、裸足じゃないか。しかも血が出ているよ。どれ、おじさんに見せてみなさい」

親切そうな笑みが浮かぶ声だった。だが、少年は一步下がった。説明のできない不気味さを、その声から感じたのだ。

「どうしたんだい、もしかして怖がっているの？ 大丈夫だよ、怖いことなんて何も無い。安心していいんだよ……」

ゆっくりと近づいてくる足音に、少年はもう一步下がった。

言葉の内容としては、ジュヌの言ったこととそう変わりない。だが受ける印象は、人間が違うところも違うものなのか。

表面上は優しげに聞こえる。しかし、そんな上辺に騙されるような少年ではない。

「……つまらない大人だな、あんた」

かすれていたが、その声は空気を震わせた。同時に、近づく足音が止まる。

おそらく、あと数歩の距離。大股で進めばほとんど一瞬で近付ける距離に、少年は乾いた笑みを浮かべた。

「俺をどうこうしたって、何の意味もないぞ。誘拐したって、金を払う親もいない」

「そうか、それは可哀想に。だからこんなところにいるんだね。でも、もう大丈夫。おじさんについておいで。怖がらなくていいよ、優しくしてあげるから……」

可哀想が好都合に聞こえた。どうやら自爆したようだ、少年は

他人事のように考える。

しかし、誘拐ではなければ一体何が目的なのだろう。それに思い至らない少年は、ある意味まだ黒く染まりきっていないと言えた。だが、それでも確実に言えるのは、この男についていってはいけない。それだけだった。

「優しくなんてしてくれなくていい。俺のことは放っておいてくれ」「そうはいかないよ。帰るところのないような子を見捨てるのは、大人としてあつてはいけないことだ。そう思うだろう？ だから心配しなくていい。ほら、おいで」

歪んだ笑みと、手を伸ばす気配がした。口調は優しくすぎるほどだが、粘りつくような視線は消えない。嫌悪すら感じる執着のようなものに、少年の笑みは凍りついた。

「どうしたんだい？ ほら、こっちに
「 触るな！」

気味の悪い気配が頬に触れる瞬間、その手を強く振り払った。

皮膚を叩く音が高く響き、男が怯んだ気配が届く。だが、それも一瞬のことだった。素晴らしい早さで平静を取り戻した男は、中途半端な優しい口調で言葉を繋ぐ。

「そんなに何を怯えてるんだい？ 僕が怖いというわけじゃないんだろう？」

「怖い？ こんなもの、怖いうちに入るはずもない。本当の恐怖というものが何なのか、あんたは知らないと見える。なあ……変態のおっさん」

「はは、面白いことを言うガキだねえ。僕のどこが変態なのか……体に訊いてみるかい！」

歪んだ笑みの気配とともに、傷ついた左手首を太い手が捕らえる。あまりの力の強さに、傷が激しく痛む。それでも抵抗して振り払おうとすると、逆に引き寄せられそうになる。力勝負など初めから無意味だ。ならばこうするしかない。

歪んだ声が笑みを降らす。夜の世界で再び腕を引かれた瞬間、少

年は手に噛みついた。

「ぎゃっ！」

醜い叫びが耳に届くと同時に、腕の拘束がゆるむ。逃げられる。そう思った時には、少年の手は男の手を振り払っていた。

突き飛ばすようにして男から距離を取り、息を整える。男は馬鹿らしいほどに、痛い痛いと言いつつ返していた。

馬鹿らしい。少年は再び、小さく呟いた。馬鹿らしい、本当になにもかもが馬鹿らしい。

それはあまりにも冷静でない思考だった。本来の彼ならば、そんなことに構ったりせずに逃げ出していたはずだ。現実としてそうすべきだった。でも、その時間はもうなかった。

男が身を起こす気配が耳に届く。少年は虚ろに見えない前を向いた。近付いてくる。そう感じた瞬間、風が唸って頬に衝撃が走った。

「こいつ！ よくもやりやがったな！」

手加減なしに殴られた。認識した時には、少年の体は宙を舞っていた。

ゴミ屑のように弾き飛ばされて、硬い木箱のようなものに背中から突っ込む。息が詰まって、全身に痛みが伝染する。殴られた頬の内側が切れたのか、唾に血の味が混じった。

「優しくしてやったらつけ上がりやがって！ この」

荒い足音の次に続いて、脇腹に何かか食い込む。蹴られた、思い至ると同時に痛みが体を貫く。短い息が口からもれ、少年は横に倒れる。

それでも叫びはしない。歯を食いしばって痛みを耐える。だが、終わりではなかった。

「この屑が！ 生きてる価値もない、ゴミのくせに！」

容赦のない蹴りが、鳩尾に決まる。意識が飛びそうになる痛みで、呼吸もできない。空っぽの胃から胃液が逆流しそうだ。痛い、苦しい、でも呻き声も上げない。

それが気に入らないのか、男の声は狂気にも似た熱を帯びる。

「なんとか言え！ ごめんなさいと泣いて謝れ！」

強く腹を蹴られる。でも、少年は何も言わない。

「薄汚いガキが！ 大人に逆らうんじゃねえ！」

無防備な脇腹に、足が叩きつけられた。息が詰まる。しかし、少年は動かない。

「泣け、叫べ！ ゴミ屑が！ 死ね！」

顎を蹴りつけられる。痛みで頭が真っ白になった。口の中が切れ、温かい液体が口の端から流れていく。

「死ね！ 死んでしまえ！」

蹴る、蹴る。

「害虫が、死にやがれ！」

蹴り続ける。

「誰にも見向きもされない屑が！」

腹に胸に、蹴りが飛ぶ。

「お前みたいなのは死んだ方が世界のためなんだよ！」

顔を殴られる。お前が死ね。咳くと咳が出た。

「生きる意味なんてないんだから！」

蹴りが止まらない。生きる意味、そんなの。

「さつさと死ねばいい！」

死ねばいいのか。

「死なないなら、殺してやる！」

それもいいかもしれない。少年は小さく笑う。

「なに笑ってやがる！ ふざけんじゃねえ！」

蹴りが止まった。けれどそれは暴力の終わりではない。力なく横たわった少年の髪を、男の手が掴む。そのまま引っ張り起こされると、酒臭い息が顔にかかった。

「本当に殺されたいのか！ ゴミ屑の分際で！」

「……ゴミだろうと屑だろうと、少しの誇りは持っている」

髪を引きちぎらんばかりの痛みの中で、少年は静かに笑む。

「それを奪うことは、誰にもできはしない。言ってもわからないだ

ろくな。 下衆が」

「舐めやがって！ 殺してやる！」

髪を掴んだ手が、少年を投げ飛ばす。抵抗する間もなく、箱らしきものの上につっ込んだ少年は、力なく空を見た。何も見えない。でもその方がいいかもしれないなかった。

美しいものを見れない代わりに、醜いものも見ずに済むから。

「死ね！ 死ねよ！」

醜く割れた声が降り注ぎ、首に気味の悪い手がかかった。

強く力が込められ、少年の細い首は悲鳴を上げる。急速に肺から空気が失われ、無いに等しかった意識は薄れていく。

こんな風に終わるのか。薄れゆく意識の中で思う。惨めで、意味のない終わり方だ。

でも、自分にはお似合いかもしれない。見えない世界の中で、少年はただ微笑んだ。

「くたばれ、屑が！」

浴びせられた罵声にも笑みを崩さず、少年は意識を手放し

「レイ」

意識が消えたのは一瞬だったと思う。だがその一瞬の間に、状況は大きく変わっていた。

「失せろ、外道。貴様のようなものにかかる慈悲など、私は持ち合わせていない」

「ひ……」

冷徹な声音に押しやられるように、騒がしい足音が遠ざかっていく。

何が起こったのか、理由は想像するしかない。けれど少年の思考は動かなかった。

考えれば、また痛みに苛まれる。もうそんなのは嫌だった。何も考えず、永遠に眠ってしまったなら、どんなに良かっただろう。

壊れた自動人形のような少年に、静かな足音が近づいてくる。ためらいのない足取りにも、少年は止まったままだった。

そんな少年の耳にため息が届く。それは呆れというより悔恨のようなそんな響きだった。

顔を覗き込む気配がして、その人は少年のそばに膝をついた。

「レイ、しっかりしろ。すぐに傷の手当てを」

「触るな」

伸ばされた手の気配が、顔のすぐ前で止まる。少年は虚ろに前を見つめたまま、うわ言のように呟いた。

「なぜ、俺は、生きているんだ。ゴミ屑だと、そんな風に言われながら」

「レイ、そんな風に考えてはいけない。誰だって生きていていいんだ。その権利は誰にも奪えはしない」

「じゃあ、じゃあなんで、俺の兄弟は殺されたんだ……？」

その問いは、ずっと心の中で繰り返されている言葉だった。

どうして殺されたのか。殺されなければならないほど、罪深いことをしたのだろうか。

なぜ、そう呟く少年に、その人の言える言葉はなかった。

「なぜ、殺されなければならないかったんだ。疎まれたとしても、あんな風に殺されなければならない理由はなかっただろう？ 傷つけられて、痛めつけられて。どれだけの絶望を感じたかなんて……ジユ又、あんたにわかるっていうのか」

その言葉は兄弟を語りながら、少年自らの心も語る言葉だった。

ジユ又はただ、少年を見つめる。肯定も否定も、そこにはない。すべてを受け入れるような、広さだけがある。

「俺たちは、生きること許されないゴミなのか？」

返らない答えを追うように、少年は夜に満ちた空を見上げる。

「だったらなんで、生まれてきたんだ？」

少しの呼吸が、壊れかけた世界に落ちた。

「誰でも生きていていい世界だって言うなら、どうして俺たちは奪われなければならぬ」

何も見えなくてよかった。見えたらきつと、耐えきれない。

「意味もなく生まれて、意味もなくすべてを奪われたのか」

少年は、壊れかけた人形のように笑った。すべては無意味、そう告げるかのよう。

「ならどうして、俺たちは生きてきたんだ？」

声が、震えた。心の底から、冷たくどす黒い感情が湧きあがる。

それは内側に透明すぎる感情も内包していて、少年の心では閉じ込めきれない。

「全部に意味がなかったって言うなら、俺は、俺たちは今まで何のために」

「レイ」

わかっているから。名前を呼ぶ声は言う。でも、心からあふれる感情は、止まることなく闇の世界を震わせた。

それはまるで、絶望的な世界をさらなる激しさで焼き尽くす、蒼炎にも似て。

「俺たちは、何のために生きて来たって言うんだよ……！」

「レイ」

叫びは温かな気配に包まれた。風と痛みにさらされ続けた冷たい体を温める、優しい腕。そんな温かさを、少年は知らなかった。ずっとそばにあったのは、幼く小さな体温だけだ。

だからだろうか。感じるぬくもりは、大きく深い。壊さないように優しく抱きしめる腕に、少年は言葉を忘れた。

「レイ……確かに、世界は理不尽なことに満ちている。本来当たり前であるべきことも、理想という言葉で祭り上げられ、特別なものとしてみなされてしまう。そんな世界に絶望するなといっても、無駄なことかもしれない。だが」

傷ついた体を労わるように、背中にまわされた手がそつと背をなでる。その声は優しく、凍りついた世界を照らす光にも似ていた。

「だが、それはお前が生きることとはまったく別の話だ。誰であるうと、生きることが望むのなら生きていてもいいんだ。人は時にその権利を蹂躪する。でも、だからと言って生きることが諦めなけれ

ばならない道理はない。生きたいと言うなら、生きていていいんだ」
耳元の声は、小さいのにはつきりと耳に届く。心地良いと言ってもいい低音の声を聞きながら、少年は考えていた。

どうしてそこまで、自分のためにしてくれるのだらう。それだけがわからない。

「そんなことを言っても……俺は」

「うん」

「俺は……もう、生きていたくないんだ。俺が生きていた意味はもう、どこにもない」

自分で口にした言葉なのに、少年はあまりの絶望に身を震わせる。誰も、自分が生きていた時間すら、壊れて消えていった。そんな中で生きなければならぬとしたら、この世界は地獄でしかない。

でもその人は、少年を世界に繋ぎとめようとする。理由なんて、無いはずなのに。

「もし……この世界で生きるのが辛すぎて、死んでしまいたいと思うのなら」

そつと、大きな手が髪をなでる。そんなことをされたのはいつのことか、少年は覚えていない。けれど込められた優しさは、偽りではないとわかった。

「私に、残りの時間を少しでも預けてくれないか。助けたいなんて大層なことは言わない。ただ……少しだけ、一緒に行かないか」

「なんで、俺なんかを、そんなに気にかけるんだよ……関係ないのに」

「……そうだな。でも、誰かの手を掴むのに、理由は要らないだろうっ？」

微笑んだ気配が、闇を照らす光のように降る。見えなくても、見えないからこそわかることもあった。

その人の微笑みは、少年のためだけに向けられたものだ、そう気付く。

「お前は、生きていていいんだよ」

微笑みながら、その手は傷ついた頬に触れた。

「辛いなら、ずっとそばにいる。手を繋ぎ続けるから。だから生きてくれ。……レイ」

優しすぎて、胸が痛くなるような声に、少年は俯いた。

生きて欲しい。その言葉は心に突き刺さる。誠実な言葉であるが故に、少年はその声に応えることはできない。

いきたくないなんて、思わない。思えない。壊れてしまえるなら、少年はそれを選ぶ。

「……俺は……」

悲しいよ。優しくされると余計、悲しくなる。そんな価値はないと、言いたくなる。

その人の広い胸に額を当てて、少年は瞼を下ろした。目が熱を帯びたように熱い。こらえ切れない声が、小さな隙間に零れ落ちる。

「俺は、もう嫌だ」

繰り返される絶望の光景が、見えない世界に広がっていく。

もう、何も知らなかった頃には戻れない。失われてしまった日常を悼むように。

少年の目から、雫が一粒、流れ落ちた。

#5 願う初冬の轍

#5 願う初冬の轍

朦朧とする意識の中でも、少年にはただ一つだけ感じられるものがあつた。

それは終わりかけた秋の風と、体を包む優しいぬくもりだ。痩せすぎで小柄な少年の体は、どちらかといえば細身なジュヌの腕でも容易に抱えられてしまう。

抱きかかえられるなんて、赤ん坊ではあるまいし。虚ろに反論してみたが、無駄だった。

「そんなに傷だらけで、強がってどうする。少しくらい頼っても、罰は当たらないよ」

かすかな苦笑いの気配は、ある意味少年以上に頑なだと言える。

結果、問答無用で抱き上げられた少年は、包まれた布の中でため息をこぼすだけだった。

そんな少年に、ジュヌは優しい声で語りかける。でも、その声は少年の意識には刻まれない。ジュヌに抱えられて進むうち、少年の意識は曖昧になっていた。

それでも、声は遠くで響くように少年の上に降る。レイ、喪われ

てしまった者はどこに行くんだろうな。この心は、この声は、その者に届くのだろうか。

わからないな、そんなことを考えるのはあんたが生きているからだよ。

そう呟くと笑みの気配が広がった。優しいな、レイは。少し寂しげな声に、少年は呟く。優しい？ 俺のどこが。投げやりに言うと、ジユヌは笑う。わからないからだよ、それが。

記憶にかろうじて残っているのはそこまでだ。あとは曖昧な意識の中に沈んでいる。ただかすかな温度を感じながら、少年は見えない世界を戻ってきた。

「……ジユヌ様！ 見つかりましたか」

焦燥がにじむ男の声に、少年の意識は浮上する。

いつの間にか意識を失っていたのか。全身を苛む痛みの中で、少年はぼんやりと考えた。

「ああ、見つかったよ。さすがにギヌヌの探索術は正確だ。だが、あまり状況は芳しくない。ラタツク、彼女はもう着いたか」

「ええ、まあ……奥でティアとギヌヌが相手してますけど。ただ」

「ただ？ 何か問題でも？」

歯切れの悪いラタツクの声に、ジユヌは疑問を投げかける。特に厳しい口調ではなかったのに、ラタツクの雰囲気は沈んだ。一言で言い表せない空気に、ジユヌは再び問う。

「何かあったのか……は言うまでもないな。エルローズは何を要求したんだ？」

「いえ、非常に言いにくいというか、お聞かせするのもおこがましいことなんですけど」

「構わない。いつものことだ」

「簡単に言わないでください……それどころじゃないんですから。だから、つまりですね、あの怪女は、ジユヌ様と一夜……」

言いかけたが、おぞましくてそれ以上言えない。そんな空気を出したラタツクに、ジユヌのため息がかぶさった。それは辟易してい

るようにも、納得しているようにもとれる。

「まあ、想定の内だ。それだけで済むなら僥倖といったところか」

「本気で言ってるんじゃないですよ？ そんなこと、おれはまだしもティアが許すはずありませんよ」

「許すも許さないもないと思うが。なんにしても、交渉次第だろう。エルローズには借りもあるが、貸しもある。そう悪いことにはなるまいよ。いや、させはしないから」

最後の言葉は、ラタックに向けられたものではなかった。いつの間にか増えた気配、清冽ささえ感じる息遣いに、ジユ又は微笑む。

「ティアは本当に心配症だな。私はそんなに無謀な性格をしていると思われているのか」

「そうおっしゃるのなら、馬鹿な考えはお捨てください。あんな女に、ジユ又様が……なんて、わたしは耐えられません。いいえ、そうすると言うならいっそのことあんな女」

「……どうするってんだい？ アタシと真正面から勝負しようってのか、お嬢ちゃん」

あざ笑うかのような低い笑いととも、煙たい独特の空気が流れてくる。

これはタバコの臭いか。あまり馴染みのない臭いに少年は、咳きこむ。そうするとジユ又の手が腕に触れ、少し尖った声が響く。

「エルローズ、ここでタバコはやめろ。この子の体に触る」

「おっと、これはジユステイ又様。失礼したね。でも許しておくれ。小汚い女の唯一の癒しなんだよ、これは」

「だとしても、ここでは謹んでくれ。それとその名で呼ぶな。今の私はただのジユ又だ」

「おやおや、これは重ねて失礼したね。でも、これは止められないね。名前はいいけど」

まったく悪びれずに言う女の声に、ジユ又は小さく笑い声を立てた。

楽しいというより、仕方ないという風な笑い方だ。だが、そういう寛大さを他の人間に求めるのは酷なのだろう。

「エルローズ・ファンシア。身分をわきまえる。本来なら、お前がジユ又様の前に立つことなどあり得ないことなのだぞ」

「おや、ラタック・ガランティノ。そんなことを言っていていいのかい？ アタシを呼び出したのは他ならぬジユステイ……ジユ又様なんだよ？」

一層濃度を増すタバコの臭いの中に、険悪な空気が流れ始める。

エルローズと呼ばれた女は、そんな空気も意に介さないのか。尖り続ける空気に、鼻歌で応えて、若いのか年寄りなのかわからない女の声が言葉を発する。

「それで、ジユ又様。アタシに何をお望みなんたい？ 封印都市から呼び出すなんて、よほどのことだとは思っけれど」

「そう、エルローズ、お前を治療法術の先駆者として見込んで頼みがある。……まず、この子の目を見てくれ」

少年を抱いたまま、ジユ又はゆっくりと移動する。何をするつもりなのか。問うことさえも億劫だった少年は何も言わない。言うべきではないと感じたせいもある。

そのうち歩みが止まり、少年はそつと柔らかい何かの上を下ろされた。

「……この子供、誰なんだい。ジユ又様がアタシを呼び出すからには、よほど重要な地位の子供……には見えないね。本当になんなんだい、この子」

「この子はレイ・マーシア。先日、ミラージア・インプスの眷族と思われる者たちに滅ぼされた、フォステスの生き残りだ」

「……おや、“Mirantes”かい。奴らに狙われて生き残るとは、運がいいのか悪いのか。どういう理由にしる珍しいこともあるもんだね。……どれ、見てみようじゃないか」

少年には意味のつかめない会話だった。それは少年の頭がいい悪い以前に、彼の世界には存在しない言語が飛び交っていたためだ。

戸惑いなど結局、強い意志の前では何の意味もない。問うことさえできなければなおさらだ。そう、少年は自分の状況に困惑していた。

何が琴線に触れたにしろ、ジユヌの言葉で女の態度がわずかに変わったのは確かだ。退廃的といっても良かった崩れた気配が、明らかに引き締まる。

タバコ臭い気配が、少年の目の前に立つ。そうして無造作といつていい手つきで少年の顎を捉えると、慣れた手つきで上を向かせた。「どれ……動くんじゃないよ。ふむ……これは」

タバコ臭い息が、もろに顔にかかって少年は顔をしかめる。だが、エルローズはまったく気にした様子もなく、少年の顔を覗き込み続けていた。

「どうだ、エルローズ。治せるか」

「アタシを見くびってもらっては困る。が、その前にジユヌ様。報酬の話をしようじゃないか。すべてはそれが終わってからだよ」

「ふざけたことを言うのはやめた方が身のためですよ、エルローズ。ジユヌ様の寛大さに付け入るその腐った性根、封印都市に放りこまれても変わっていないようですね。お前の言葉など、本来なら聞く必要もないというのを、いまだに理解していないと見える」

不意に聞こえた険悪な声に、少年の顎を捉えていた手の感触が消えた。

だが、顔を覗き込む気配は消えない。じつと視線を注ぎながら、エルローズは氷の炎のような声に応える。

「ギヌス坊。いつからあんたはそんなに偉くなったんだい？ 仮にもアタシはあんたの姉弟子。呪法士としての実力も、あんたに劣らない。フラン導師の愛弟子なんて呼ばれて、いい気になってるんじゃないのかい？」

「お前にどう思われようと私には関係のないことです。今の私はジユヌ様の呪法士。それ以外の呼び名など、何の意味もない」

「随分と心酔しているじゃないか。オル・メイセルの氷獣が、すっ

かり手なずけられてしまったと見えるね。さすがはジュ又様、というべきかな」

「褒められていると受け取っておこう。それでエルローズ、報酬の件だが」

「ジュ又様！」

ギ又スの呼びかけは悲鳴にも似ていた。何も言わないが、ラタックとティアの気配も、険しさを増している。それでもジュ又は穏やかさを崩さない。

「報酬は、私の心でどうだろう？」

「じゅ、ジュ又様？ なに言ってるんですか」

おかしなことを言い出した。言外にそう込められたラタックの声に、ジュ又は楽しげに笑い声を立てる。何が面白いのか、本人以外にはわからない。

ただ、ジュ又の意図は語られない言葉の外にあった。

「なるほど、心とはね。つまり、アタシにただ働きをしるというわけかい」

「そう取るならそれでも構わない。私の心にお前の名を刻もう。真名を今、ここに示せ」

揺らぐことのないジュ又の言葉に、女は重々しく息を吐く。

敵わない、苦笑の気配はそう告げている。それは目の前の少年に、一番伝わっていた。

「……それは、確かに光栄なことだね。でも、今は止めておくよ。

正直、それだけの期待に応えられる自信がないんでね」

「それはつまり、治せないということか」

「そうは言っていないよ。治すことはできる。でも、この子の体を蝕んでいるのは……カルマスの毒なんだ」

「カルマスの毒……ですか」

エルローズの言葉に反応したのは、意外にもギ又スだけだった。

低く唸るような、彼には似つかわしくない感情的な声が、重々しく空気を支配する。

「なんと愚かな」

「ギヌス、一体どうしたって言うの。カルマスの毒って、一体」

「お嬢ちゃん、そう早くもんじゃやない。わからないならちゃんと説明してあげるよ。ただ、少し救いのない話になるかもしれない……が、ね」

言葉の間は、少年に向けられたものだった。聞きたくないなら聞かなくてもいい。予想外の気遣いだったが、少年は緩慢に首を横に振った。

「……レイ、無理に……」

「意外にジユ又様も過保護だね。本人が聞きたいって言うんだから聞かせてやるべきだよ。大体が、これを背負うのはこの子自身なんだ。今を誤魔化したからって、痛みは消えない」

「消えないのではなく、消せない、でしょう。エルローズ、お前の治療法術が優れているのは認めます。しかし、これはそういう次元の話ではないでしょう」

「待て待て、ギヌス。おれたちにもわかるよう話せ。まず、カルマスの毒って言うのは何なんだ。話の感じでは、厄介な毒みたいだが」

「厄介も何ありませんよ、ラタック。カルマスの毒というのは」
途切れた言葉に含まれた重さは、消すことができない。否応なしに重苦しくなる空気に、ギヌスの冷めた声が静かに落ちていく。

「カルマスの毒は、肉体と精神を破壊する呪毒。完全に解毒する薬も術も存在しない、最も悪しき呪毒の一つです」

「カルマスというのは、古アルケルト語で“Karmase”と発音する言葉で、意味は業。そのため別名、業毒とも呼ばれている。ギヌス坊が言う通り、最悪な毒だよ。毒というより、呪いに近いものなんだ、これは。一度体に取り込まれれば、容易に抜くことができず、その影響は体だけでなく心にまで及ぶ。実際、この子が正気を保っているのは奇跡だと思うよ。普通の人間なら、体が死ぬ前に精神を蝕まれて発狂する」

崩れた雰囲気消して語るエルローズの視線が、少年に当たる。

探るような視線にも、少年は反応を示さない。ただ、そうなのか、と他人事のように考えるだけだ。そうか、この心は壊れていくのか。その未来は、あまり感情を引きださない。

「だから正直、アタシも驚いてはいるんだ。こんな子供が、カルマスの毒に耐えられるなんてね。一体どんな精神をしているのか、少し興味がある。だからね」

向けられた視線が離れ、エルローズの気配が遠ざかる。軽い足音が重苦しい空気を震わせて、女の低い笑いが耳に届く。

「この子の心にアタシの真名を刻もう。それを今回の報酬にする。ジュヌ様には劣るが、完璧を望めないのだからそれくらいで十分だよ。なに、そう不安そうな顔をするもんじゃない。別に取って喰おうっていうんじゃないんだから」

「取って喰わないにしても、ずいぶん報酬の質を下げたな。言っちゃ悪いが、この子供に真名を教えても、あんたには何の得もないとおれは思うが」

「わかってないねえ、ラタック卿。真名は刻まれた人間の強さに伴って、刻んだ人間の力を高める。カルマスの毒に耐えられる心ならアタシの法力の足しになるはずだよ。まあ、物質的に豊かになるわけじゃないが、決して損にはならない、というわけさ」

完全に蚊帳の外で話が進んでいたが、少年は口を挟まなかった。

いや、挟めなかったという方が正しいか。仮に少年なんて見捨ててしまえと話が進んだなら、少しは反応したかもしれない。もちろん助けてくれとは言わないが。

だが現実には、少年の望みとは真逆に進みつつある。ここにはお節介で無神経な人間しかいないのだろうか。そう思いながらも、少年は何か言う気力もなかった。

「悪名高いエルローズ・ファンシアにしては良心的な提案ね。以前ならどうあつてもジュヌ様に取り入ろうと考えていたのに、封印都市で改心でもしたのかしら？」

「相変わらず意地の悪いお嬢ちゃんだね。アタシはいつでも良心的

だよ。他の呪法士を見てごらんよ。今でこそ大人しいが、昔のギヌス坊なんて最悪だったじゃないか」

「お前だけには言われたくない話ですね。血濡れの治療士と呼ばれているのを棚に上げて」

「それくらいにしておきなさい。エルローズ、その報酬を求めるなら、レイと交渉しなければならぬよ。他ならぬ知らず、レイの心に関することを私が勝手に決めるわけにはいかないだろう」

延々と続きそうな言い合いに、ジユヌの冷静な声が割り込む。

互いに想うところがあるうとも、ジユヌの言葉に逆らうことはできないのか。ほぼ同時に止まった言葉の群れに、ジユヌの微笑みが広がる。

「……まったく簡単に言ってくれね。こんな小さな子供に決断を任せるとは、相変わらずジユヌ様は大胆というか無茶苦茶というか。大体この子、そんな話が理解できるのかい」

「レイは、とても賢い子だ。私たち大人より聡い部分がある。お前の話も理解しているよ」

「ふむ……ジユヌ様がそんな風に言うとは珍しい。どれ、話をしてみるかね」

一度は遠ざかった気配が、再び近づいてくる。それを淡々と意識に刻みながら、少年は少し顔を上げた。おそらく、その先に女の顔がある。

見えない世界では女の表情は読めない。けれどタバコ臭い息遣いで、エルローズが笑っているのだけはわかった。

「レイ・マーシアだったか。あんた、アタシの治療を受ける気はあるかい？」

「……… 必要ない。どうせ、失っても誰も困らない命だ。壊れられるなら、このままでいい」

「おい、お前……！」

「ラタック」

険しい声を上げたラタックを、ジユヌが素早く制止する。逆らう

べき理由が見つけれなかったのか、それともその声には逆らえなかったのか。どちらにせよ結果、彼は黙った。

「随分意識を侵食されているんだね。自らの最期を望むなんて、子供らしからぬ思考だ。子供というのはもっと、未来に夢を見ているものだと思っていたけど」

「夢？ その言葉こそ夢物語だな」

淡々としていたが、少年の声に明らかな嘲笑が混じる。人に、世界に、存在に対する嘲笑だ。けれど一番嘲笑っていたのは、他ならぬ彼自身の心だった。

「俺の人生を見せることができないのが残念だ。もし見ることができたなら、そんなことは決して言わないはずだからな。奪い、奪われ、そして最後には何もかも失った。残っているのは壊れかけたこの体だけ。そんな世界に夢を見られる心とはどんなものか、ぜひ教えてもらいたいものだ」

「……確かに、普通の子供ではないようだね。なら、こっちもそれなりの対応をしようか」

少しだけ、エルローズの声が低くなった。そうするとまるで男の声のようだが、体格からくる声量は女のものだ。闇の中で見上げた女の気配は、もう笑ってはいない。

不穏な気配だ。そう思った瞬間、鋭く風を切る音が耳を打ち

「甘ったれるんじゃないよ」

その音は、尋常でない鋭さで空気を震わせた。

頬を襲った衝撃に少年はあえなく横倒しになる。息を飲む空気が、空間に広がっていく。

少年は、動くことができなかった。痛いというより、心に受けた衝撃の方が強い。弱った人間、しかも子供を平然と張り倒す性根とはどういふものなのか。

それは続けて放たれた言葉で、少年にもはつきりわかった。

「甘ったれるんじゃないよ。命を捨ててもらった上、助けようとまでしてくれるっていうのに、死んでしまいたいなんてよく言えたも

んだ。生きたくても、踏みにじられてそのまま放っておかれる人間だっているんだよ、この世にはね。確かにあんたがどうやって生きてきたかなんて、アタシは知らない。知りたいとも思わない。けど、これだけは言えるね。あんた、独りよがりすぎるよ。人は自分一人で生きていくわけじゃない。助けようとしてくれる人間は、望んだって現れるわけじゃない。生きて欲しいと望まれて、その手を振り払う残酷さをあんたは知らなすぎる。贅沢なんだよ。誰にでも、救いが降るわけじゃない」

一気にまくし立てられて、少年は不覚にも言い返すことができなかった。

その内容は、つまり、助けてくれる人間の心を踏みにじるな、誰にでも助けの手が差し伸べられるわけではない、ということだろう。それを否定するつもりはない。間違いだとも言い切れるはずもない。でも、心は別だ。

「……あんたの言いたいことはわかる。色々突っ込みたいことがないわけじゃないけど。でも、それは強者の言い分だ。常に誰かに手を差し伸べられる者の感情だ。俺は、自分に価値があるとは感じられない。だから、どうして生きると言われるのかわからない。あんたらが俺に何を見ているのか、俺にはわからないんだ」

「だったら、生きればいいじゃないかい」

もっと強烈な反撃が来ると思っていた。しかし少年に返されたのは、あまりにもシンプルな言葉だけだ。顔も見えない女の視線は、言葉と同じで簡潔な気配を持つ。

「わからないっていうなら、まずは生きてみればいいんだよ。死ぬことは、正直な話、簡単かどうかは別としていつでもできる。死んでいないのなら、生きていけと言われているようなものさ。悩むほどのことじゃない、もっと簡単に考えなよ」

要は死んでいないのだから生きてみればいい。生か死か、簡潔な二択を突き付けられて、少年は再び黙る。難しく考えても結局、袋小路にはまるだけなのか。

いつのまにか説得されそうになっている自分に気付いて、少年は顔をしかめる。二択、そんな言葉では、自分の心を表しきれない。けれど、思考はかなりシンプルになった。

「死んでいないのだから、生きればいい、か」

ただそれだけなら、悩む必要はない。二択のように思えるが、現実には選択も何も無い。進んで死なない代わりに生きる。つまり、ただ問題を先延ばしにするだけの話だ。

その間に変化を期待する。積極的に生を望まれるよりは、いくらか受け入れやすかった。

「なら、あとで死んでしまったとしても、文句はつけないんだな」

「アタシはね。ジュヌ様がどう言うかはわからないけど。でも今あなたに強く生きろと説いたところで、穴に声を叫ぶようなものだろう？ だったら、妥協点を探すしかないよ」

「それがこの話の結末か。でも、俺が決められないって言うたらどうするつもりだ」

「じゃあ、多数決でも取るかい？」

「……やめておく。よく考えたら俺には結果が見えないし」

言いながら、少年はいつの間にか冷静になっている自分に気付いた。

先のことなんて、考えられない。でも、ここで何もかも捨てることが最善でないことくらい、とつくに気が付いている。

ただ、問題は心が耐えられるかどうかだ。少年の心に焼きついた光景は、毒とは関係なしに心を苛むだろう。

「レイ、今は生きたくないのだとしても、ずっとそうだとは限らない」

いつからそこにいたのか、すぐ傍らでジュヌの声が聞こえた。

肩に触れたのは、温かい手だ。そっと少年の肩に手をかけて、優しく、強く語りかける。

「痛みで耐えきれないのだとしても、ずっと同じ痛みが続くわけではない。消えないのだとしても、少しは楽になるかもしれない。だ

からレイ、今は」

「ジュヌ様……」

ティアの声が、悲しげに揺れて消える。その意味を、少年は知らない。知らなくていい。

「今は、生きていてくれ。この先の道で、もし、辛くて生きられないのなら、その時は」

「……わかったよ」

それ以上、優しいこの人に言わせてはいけない。そんな気がした。少年は体を起こすと、ため息を一つ落とす。ジュヌの言葉の温かさは、出会った時から変わりが無い。同情や憐みではなく、そういう人間なのだと、少年はやつと気付いた。

「今は、そういうことにする。俺がそう決めることにどういう意味があるかはわからないけど、あんたらの罪悪感を刺激するのは嫌だ。……俺は、俺のためだけに生きたい」

可愛げのない、どこかでそんな声が聞こえた。けれど、少年は眉一つ動かさない。

それは、決意だった。命という轍を、道に刻みつける想いだ。肩に触れた手が、わずかなぬくもりを返す。それで充分だった。それ以上は、必要ない。

「そうかい、なら、治療を始めよう」

静かに、細い手のひらが、額に触れる。

冷たく硬い感触だった。そう認識した瞬間、少年の意識は霧に覆われるように遠ざかる。

何を。その問いは声にならずに闇へと散っていく。消えていく意識の中で、低い女の声が耳元で囁いた。

「あなたに、報酬をもらう。アタシの真名を、その心に刻んでおくれ。アタシは」

“E r a f e l l i a”（エラフィリア）。

慣れない響きは、心の奥に沈んでいく。少年の心は眠りの穏やかさに包まれて、深く、深く、水底を目指すように沈み続ける。

そして完全に眠りに沈む瞬間、少年の心は一つの咳きを聞く。それは、消え去りそうなほど細い、切ない声だった。

……でも、貰ったものに対して、アタシの力は釣り合わないかもしれない。だから、何かあればアタシを呼んでくれていいよ。それで許しておくれ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1497s/>

蒼炎のプロムナード

2011年4月2日19時10分発行